

**長田穂波遺稿<sup>1)</sup>**

死んだ穂波が遺したものは

阿部 安成

**穂波の死** 長田穂波は香川県大島に生きた療養者のなかで、もっとも多くの文章を書いた思索者だとおもう。活字を用いた15冊の著書を上梓し(ただし2冊は未見)、歿後には1冊の遺稿選集が編まれたほどに文字を綴りつづけた穂波である。また、彼が属したキリスト教信徒の団体である霊交会の機関紙『霊交』をみると、現存する号のすべてに、彼は文章を寄せていた<sup>2)</sup>。大島で発行された、療養所当局による総合誌『藻汐草』、戦時下から戦後初期にかけての手づくり回覧誌『青松』、自治会の機関紙『報知大島』、修養団大島支部の機関紙『つばさ』のいずれにも彼は論稿を載せ、自治会機関紙をみれば一時期その編集が穂波によって担われていたとわかるし、修養団大島支部機関紙は彼ひとりによってつくられていたと伝えられている。

島外で発行された逐次刊行物にも、彼の文章がしばしば掲載された<sup>3)</sup>。なかでも、岡山県内でキリスト者の内田正規が発行した『清流』(1941年～1944年)には、活字で印刷された穂波の最後の論稿となった「灯火を翳せる者」のおよそ前半部が<sup>4)</sup>、また、「救癩」を掲げた日本救癩協会(のちに楓十字協会)が発行した『楓の蔭』には、穂波の歿後に数編の彼の「遺稿」が掲載された(1946年～1948年)。

大島に療養所が開設された1909年のその年に、彼はその島にやってきた。穂波は大島で、1945

1) 本稿は2009年度財団法人福武学術文化振興財団瀬戸内海文化研究・活動支援助成による研究題目「瀬戸内海域のハンセン病療養所における情報集積と交流」の成果の1つであり、別稿「死んだ穂波の横顔に - 長田穂波探索」(滋賀大学経済学部Working Paper Series No.130、2010年4月)、「長田穂波の聖 - 消えゆくものども」(同前No.131、2010年5月)と組みになる。

2) 編集もほぼすべて穂波がおこなった『霊交』については、そのあとがきを翻刻して解説をくわえた別稿(「資料紹介『霊交』にあとがきを記す。」「彦根論叢」『滋賀大学経済学部研究年報』に2009年より連載中)と2010年に霊交会がデジタル画像から作製したリプリント版『霊交』のための解説のもととなった別稿(「『霊交』という歴史」仮題、滋賀大学経済学部Working Paper Seriesで2010年5月刊行予定)を参照。

3) 大島に残っているかぎりでのそれらの目録を阿部安成「資料紹介 長田穂波日記 1936年 - 療養所のなかの生の痕跡」(3)(『滋賀大学経済学部研究年報』第15巻、2008年)に掲載した。

4) 『清流』は管見のかぎり霊交会にのみ所蔵されている(ただし3号分欠)。そこに掲載された穂波の論稿の全文を前掲阿部「死んだ穂波の横顔に」「長田穂波の聖」に収載した。

年12月18日に心臓炎で亡くなった。享年55歳。彼はいまでは、ほとんど忘れられている。

2004年3月から国立療養所大島青松園（以下、療養所は大島青松園のとおり略記する）で調査を始めたわたしは、その翌2005年から霊交会教会堂図書室で穂波の痕跡を探していた。文献探査をおこなうなか、教会堂図書室であらたに、彼の数冊の著書と、1冊の日記と、複数の手書き原稿などがみつかった。これまでもわたしは、穂波の著作目録や執筆記事索引、霊交会蔵書目録を不十分ながらもつづけてきたが、2008年9月にみつかった手書き原稿については、うっかりその目録をつくり忘れていたと気づいた。

ここでは、霊交会教会堂図書室で保管されていたその手書き原稿目録と、島外で穂波の歿後に発行された逐次刊行物『楓の蔭』に限定するに掲載された「遺稿」の全文を紹介することとした。この作業をとおして、いつもわたしたちの仕事にご理解をお寄せくださる霊交会の方々に感謝を捧げる（どうもありがとうございました）。

忘れられた穂波にみあう扱いとってよいのか、彼についての評伝はいまだ1冊もない<sup>5)</sup>。それにちかい文献には、大島での療養者だった土谷勉が、霊交会の創設者のひとりである三宅官之治について穂波が記した伝記の原稿に、穂波と宣教師エリクソンの事績を書きくわえた『癩院創世』（木村武彦、1949年）があるにとどまる。ただしここでの主役は三宅であり、穂波は霊交会の活動にかかわってとりあげられただけ、とってよい扱いとなっている。これからあらたに穂波が知られてゆくためにも、遺稿がどのようにあったのか、それはどのような文章なのかを記録することが必要と考え、本稿でそれを展開することとした。

**手稿の所在** 2008年には、霊交会教会堂図書室の書架改修工事とともに、これまでおこなわれなかったそこでのほぼ悉皆の調査が実施された。その作業がすすむなかで、手書き原稿の一群がみつかった。「長田穂波」「穂波」とはっきりとした署名のある原稿もあれば、まったくそれが無いもの



もある。だが筆跡をみれば、いずれも同一人がペンで記した原稿だとわかる。穂波がみずからペン

<sup>5)</sup> 執筆の経緯、執筆者の経歴が不明の、草間潤之助「隠れたる世界的詩人長田穂波の伝記 - 大島青松園に生涯を過ごせる」（『讃岐公論』讃岐公論社、第41巻第2号、1971年2月～第41巻第8号、1971年8月）という連載7回で中断したままとなった未完の創作がある。

をとって記した文章である。

これらのなかには、たとえば、『霊交』第219号(1937年2月10日)に掲載された論稿「私は<sup>〔からたち〕</sup>積殻である」の元原稿があるとおり、活字となって霊交会機関紙に掲載された元の文章もふくまれている(ただしこの稿は手書き版と活字版ではかなり異なる)。穂波歿後に彼の死を悼む号を編んだ『青松』第17号(1946年1月)に載った石本俊市の「追悼感話」をみるとそこには、穂波の著作目録が示されたうえで、その14冊のほかにも「トラクト二頁版のもの四十五種あり」と記されていた<sup>6)</sup>。以下にその表題などを示した手書き原稿のなかには、数頁にわたる長大な論稿もあれば、「これで、お話は、をしまい」と末尾に記される型の2頁の(下記<sup>23 24</sup>)、あるいはそうした定型の文言のない2頁の文章も多数綴じられている。これらがさきの引用にいうトラクト(tract)なのかもしれない。ただしその数は45よりも多い。

以下に、紙縫りで仮綴されたりされていなかったりする原稿のまとめりごとに ~ 24の番号をつけて、穂波の手書き原稿の情報を示す(その末尾に年月日が記載された原稿もある。以下では元号を西暦にかえ、「年」「月」「日」をつけた。〔 〕内の表記はルビもふくめ阿部による。【 】の見出しは「 」でくくられた題の原稿をまとめた表題とおもわれるものにつけた)



「神憧哭禱」<sub>、</sub>「元始より」<sub>、</sub>「先祖のうた」<sub>、</sub>「二流の悲争」<sub>、</sub>  
 「洪水の浪音」<sub>、</sub>「みだれける」<sub>、</sub>「信仰の父」<sub>、</sub>「密室の神」<sub>、</sub>「ふ  
 た児」<sub>、</sub>「祝福せずば！」<sub>、</sub>「作夢者」<sub>、</sub>「創造の神よ」  
 [20字×10行×2面のB4判よりやや小さい原稿用紙92枚。  
 表題ごとにそのうえに二重の四角のなかに十字を描いた記号  
 がある。「創造の神よ」の末尾に「完」の文字]

「光りはをど〔<sup>〔る、か?〕</sup>欠〕(1935年1月)、「朝の祈家」(1935年1月)、「人生はカンパス  
 なり」(1935年1月)、「婚せんと為す人へ」<sub>、</sub>「嵐」(1935年2月)、「心をのゝく」<sub>、</sub>「友逝ける夜」  
 (1935年2月)、「しゞま」(1935年2月)、「生命は凡てなり」<sub>、</sub>「音楽会」<sub>、</sub>「彼れを視よ」<sub>、</sub>「妹  
 はうたへる」<sub>、</sub>「重病室」<sub>、</sub>「聖餐式の前夜」<sub>、</sub>「お母さま」<sub>、</sub>「信仰の火」<sub>、</sub>「恋？」<sub>、</sub>「孤島の生活」<sub>、</sub>「一  
 人はイエス様」<sub>、</sub>「欲しい時」<sub>、</sub>「充てる喜び」<sub>、</sub>「ありがたい」<sub>、</sub>「耐え難き日」<sub>、</sub>「光りの光り」<sub>、</sub>「何

<sup>6)</sup>この「追悼感話」は前掲阿部「死んだ穂波の横顔に」に全文掲載した。

か尊き(或る物語よみて)、「題それ!」、「からて」、「ST君へ」、「雪コンコン」、「梅の香」、「正直よ」、「祈なきつどひ」、「再度燃えよ」、「さゝえて下さい」、「真剣」、「われ罪人の首なり」、「聖餐の席」、「生命の魚」、「紫雲」、「つばめ」、「田中文男博士」、「戸塚運平師」(1935年1月)、「挨拶の中より」、「塚田先生(神戸)」、「賀川豊彦師」、「熱血」

【大島情調】、「前加記」、「血涙がにじむ」、「飛ぶ火玉」、「やむ娘十八」、「行く雲に」、「小雨しとしと」、「春の大島」、「魂を盗まれし人」、「愚痴のかたまり」、「母こひし」、「空気が吸へる」、「雨しづく」、「女の友」、「無心無物」、「漂泊人」、「情けの小<sup>へ</sup>刃」、「治療室」、「院の春灯」、「春風」、「島つゞじ(小説より)」、「むかしの夢」、「星と親しむ」、「大漁」

「神経痛」、「青年へ」、「良心も救ひを要す」、「この安けさ」(1935年7月下旬)、「夏の朝」

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙63枚。「No.3 10×20」の印字。原稿用紙中央に記号。手書きのノンブルは1

~53、45~54。「大島情調」の表題は二重波線で囲まれ「前加記」には「これは大島を『見たまゝ』素描したので、信仰とか修養とかの詩ではない、普通の小唄に近いものと思ふ。しかし是は泣と血との記録たる事は疑えない。人生そ

のまゝに漲ぎれる生血に何か深い匂ひがある。別天地には涙の高い香りと悪暗い影と輝く光明とが錯交する。祈の鐘を高鳴しつゝ歌ひ度いと思ふ!」とあり、「大漁」のあとに「附記」として「大島情調は一先これで止めて今後は出来次第に混記する事にする。もし神と救ひに反する詩があれば大島情調つまり島の写生であると思つて頂きたい」と閉じられている]



「無花果の蔭」、「祝辞」、「時は流るる」、「ねたむ心?」

〔無題〕、「神は愛なり」、「〔無題〕、「神が決定す」、「阿呆奴」、「受難週間」、「エクレシヤ」、「〔無題〕、「てエーちゃん」、「忘れられた功労者」、「便所掃除」、「糞たれめッ」(1937年6月10日)、「聖書の友達」、「信じて受くべし」、「口に言ひ顕也」、「神よこれで」



〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙36枚。「10×20」の印字。表題ごとにそのうえに二重の四

角のなかに円の描いた記号がある)

長田穂波「たゞ涙にて候」(7月2日、野島所長宛て) 長田穂波「弔辞」(1937年5月25日、



大谷皇太后大夫宛て)「上のみ仰げ」,「神国」,「その場合」,「謙遜」,「寝台」,「人間を感謝」,「新約研究」,「己れの義」,「葬送話」,「知れば知る程」,「こゝに死なぬ」,「愛の発露」,「主を偲ぶ」,「閑暇」,「瞑想と祈禱」,「よろこび」,「胸にしみる」,「国柄」,「二・二六」,「活して呉る」,「愚者」,「直感」,「贖はれねばならぬ友」,「芸術考」,「宣言書」(1937

年3月23日)「神・人・救」,「闘病術?」,「みこゝろを!」,「多忙な無駄」,「御再臨の日迄」  
〔無題後欠〕

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙34.5枚。「10×20」の印字。表題ごとにそのうえに二重の四角のなかに円を描いた記号があり、 の記号とはいくらか異なる〕

長田穂波【生活と祈禱】「人間の真底」,「人生の帰結」,「絶対の服従」,「いまは安し」,「昭和十二年一月二日」,「方舟の浮く雨」,「靈交」,「不退転」,「勝利の道筋」,「戦争」,「神わらひ給はむ」,「生命の神秘」,「主よ来り給へ」,「福音の使徒」,「エレミヤ」,「淋しい自分」,「人こひし!」,「真愛の生命」〔後欠〕

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙38枚。「10×20」の印字。表題ごとにそのうえに二重の四角のなかに円を描いた記号があり、 の記号とはいくらか異なる〕

「真の家族主義」(1936年3月下旬)

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙13枚。「No.13 10×20」の印字。手書きのノンブルは1~12、12。欄外に「改稿の要を認む」の書き込み。末尾の日付の「下旬」が赤ペンで未梢されて「八日」と追記〕

「罪とは何ぞ!」(1936年1月30日)

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙9枚。「No.13 10×20」の印字。手書きのノンブルは1~9。綴じなし〕

「永遠を得る」

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙7枚。「No.13 10×20」の印字。表題のうえに円の記号。綴じなし〕

「信じて疑はず」

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙7枚。「No.13 10×20」の印字。表題のうえに円の記号。綴じなし〕

「母性愛」<sub>、</sub>「処女マリヤよ」<sub>、</sub>「妻としての女性」

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙22枚。「No.13 10×20」の印字。表題ごとにそのうえに円の記号〕



長田穂波「生命の開拓者(一)」<sub>、</sub>三宅清泉「クリスマスにつきて」〔後欠〕

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙12枚。「No.13 10×20」の印字。手書きのノンブルは2~13。「生命の開拓者(一)」の末尾に「本稿は一ヶ年<sup>経</sup>続して各方面に開拓の鋤を振ふべく導かれてゐます」とある。綴じ穴があるが綴じなし〕

穂波「神のつくりしもの」(1936年11月1日)

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙12枚。「No.13 10×20」の印字〕

穂波「夢かうつゝか?」

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙10枚。「No.13 10×20」の印字〕

長田穂波「除夜の鐘」

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙2枚。「No.13 10×20」の印字。末尾に「附記 = 一月の発行誌面であれば過ぎし年の日記をくりて除夜の鐘搗く時の気持を其儘に詩ひました。近く迎ふる除夜の鐘も祈り明して斯ふした事を例年と同じく味ふことでせうから!」〕

長田穂波「インマヌエル」

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙3枚。「No.13 10×20」の印字。本文冒頭に「本稿は昭和十一年のクリスマス祝会席上にての感話の筆記なり」〕

長田穂波「祝天長節」(1937年)

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙7枚。「No.13 10×20」の印字〕

長田穂波「私は枳殻である」

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙9枚。「No.13 10×20」の印字〕

長田穂波「勝利の森」

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙5枚。「No.13 10×20」の印字〕

長田穂波「愛なきか穂波は」(1937年5月2日)

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙10枚。「No.13 10×20」の印字〕

長田穂波「岡山県ロータリー会一行/歓迎会席上にて」(1937年5月9日)

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙7枚。「No.13 10×20」の印字〕

長田穂波「昭和十二年/六月十六日/集会席上にて」

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙7枚。「No.13 10×20」の印字。手書きのノンブルは1~7〕

〔8月26日水曜日の手帖紙片に詩〕

〔表 8月28日金曜日の手帖紙片に詩/裏 辞典の金額などメモ〕

<sup>21</sup> 「長生の家読後」

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙2枚。「No.13 10×20」の印字〕

<sup>22</sup> 長田穂波著「祈禱の生活」(1937年11月3日)

〔表紙はブルーブラックインク、20字×10行×2面のA4判原稿用紙1枚、「No.13 10×20」の印字。本文はブラックインク、20字×10行×2面のA4判原稿用紙1枚、「10×20」の印字。綴じなし〕

<sup>23</sup> 「尊き犠牲」, 「神のプリズム」, 「鮎たきの鮎」, 「太陽の恵み」, 「兄弟猫の実話」, 「私でない神さまです」

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙8枚。「No.13 10×20」の印字〕

<sup>24</sup> 「祈の果」

〔20字×10行×2面のA4判原稿用紙2枚。「No.13 10×20」の印字。綴じなし〕

これらの手書き原稿の束といっしょに、ペン書きのノートも保存されていた。ただしそれらの筆記が穂波の手によるものかどうかは、まだはっきりとしていない。

霊交会教会堂図書室で保存されていた原稿以外に現存する穂波の手稿には、2009年4月に島外



から霊交会に寄贈された穂波の書簡などがある<sup>7)</sup>。1つは、書簡寄贈者の祖父であり、矢内原忠雄とともにいくども大島を訪ねた橋新<sup>はじめ</sup>に穂波が宛てた手紙(4月27日付)もう1つは、「藤井武全集出版記念会へ/ごあいさつ申上ます」と書き始まるおそらく祝辞用の原稿(1940年6月14日付)である。霊交会教会堂図書室には、1938年から1940年にかけて再刊された『藤井武全集』全12巻(矢内原忠雄編、藤井武全集刊行会発行)がある。出版記念会への挨拶となる原稿は、穂波と島外の人びととの交流を伝える手稿である。

**救癩と穂波** 東京を所在地とする日本救癩協会が発行した逐次刊行物に『日本MTL』があった。その継続後紙となる『楓の蔭』の第122号(1941年6月1日)で、紙面の「旧刊・新刊」欄で紹介された3冊のうちの1冊に、穂波の著書がみえる。

長田穂波著/靈魂は羽ばたく/此の書は昭和三年に刊行されて久しく絶版になつて居た長田さんの第一詩集を、日曜世界社の西阪氏が再刊されたもので、此の書の価値については今更説く返も無い程である。病友の個人詩集として最も早く出たものであるとともに多くの人々の魂に食ひ入りそれをゆるがしたものである、今此の書に対するとなつかしきの湧いて来るのを覚えると同時に、最近の詩藻の上梓されんことを願うてやまぬものがある。/(三十四六判、三〇〇頁、価一円、日曜世界社発行)

このとおり、穂波の詩集である『靈魂は羽ばたく』は、再刊の時点(1940年)でその初版(1928年発行)が、「病友の個人詩集として最も早く出たもの」と知られていたのだ<sup>8)</sup>。

自分の作品を紹介した『楓の蔭』に穂波は、「島庵独語」(第132号、1942年4月1日)、「松籟海鼓」(第137号、1942年9月1日)、「恩寵三十年」(第161号、1944年12月1日)と題した文章を寄稿した。穂波はまえ2つの題名を気に入っていたのだろう。大島で発行された2つの逐次刊

<sup>7)</sup>阿部安成・石居人也「ゆくりなくも - 国立療養所大島青松園キリスト教霊交会 2009年4月・5月調査報告」(滋賀大学経済学部Working Paper Series No.113、2009年6月)を参照。

<sup>8)</sup>大岡信責任編集『ハンセン病文学全集』第6巻詩1(皓星社、2003年)は『靈魂は羽ばたく』の書誌情報を1940年日曜世界社刊とのみ示し、その初版が1928年光友社刊であることにふれていない。また同書所収解説が「ひろく推奨するに価する優れた本」と讃える森田進『詩とハンセン病』(土曜美術社出版販売、2003年)には「日本で初めてのライ者の詩集『いのちの芽』は、一九五三年四月十五日、京都市にあった三一書房から刊行された」と記されている。Webcat Plusで検索すると森田の勤務先として示されている恵泉女学園大学図書館に長田穂波『詩集 靈魂は羽ばたく』(光友社、1928年)が所蔵されているとわかった。森田は穂波の作品を知らないのか、穂波は「ライ者」ではないのか、この書物は「詩集」ではないのか。



行物に、その語がみえる。かつて『藻汐草』誌上に寄せていた連載の表題が「松籟海鼓」だったし（1935年～1938年、1942年～1944年）、それが休刊となったのちに手書きでつくられた『青松』誌上で、穂波は「島庵独語」と「松籟海鼓」の論題を復活させることとなる（1944年～1945年）、療養所の療養所における生活の1つの要として、文章を綴ることに生きる姿勢をつらぬいた穂波は、大島で活版印刷による逐次刊行物がなくなったのちにも、『楓の蔭』紙上に論稿を寄せていた。『楓の蔭』紙面では、ただその名だけが記されたり、あるいは、「大島」や「大島青松園」が名のまえに記されたりしていた穂波である。大量の寄稿とはいえない掲載数だが、穂波と日本救癩協会とのつながりが想定できよう。ただし、穂波の文章が掲載された『楓の蔭』は、いまのところ大島ではみつかっていない。『日本MTL』もほとんどない<sup>9)</sup>。

不二出版による『編集復刻版 近現代日本ハンセン病問題資料集成』補巻 18、19（ともに2009年）には、『楓の蔭』が収録されている。第二次世界大戦後の発行号もあり、ガリ版刷りとなった『楓の蔭』もそこにはみえる。

その第175号（1946年3月1日、ガリ版）には、「米国のエリクソン夫人より手紙」が掲載された。ロイス・エリクソンからの手紙（1945年12月26日付）の訳文である。ロイスの夫は宣教師として大島の霊交会には不可欠の人物で、穂波は彼から洗礼をうけていた。この書簡は、だれに宛てられ、だれが訳したのかはわからない。そうした情報は記されていない。文面からすると、おそらく香川県高松近辺に住む旧友に送った手紙とおもわれる。その末尾のほうに、「開戦後大島の方々の前のと別な小詩集を出版したと申して下さい。出来るだけ早く数冊送ります。皆さんがそれを読まれて「日本人はこんな 〔判断不能〕 とは知らなかつた」と申します。こうして大島の小さな詩が日本のお友達を作つてゐます。どこの国でも他国のことを虚偽に報道しましたから」と、大島の人びとへの伝言が記されていた。

ロイスはたんに宣教師の妻として大島にかよっていたのではなく、彼女と大島の療養者たちのあいだには詩の英訳をとおした交流があった。書簡にいう「前の」がおそらく穂波の英訳詩集『燃ゆる心』で、それとは「別な小詩集」が Souls Undaunted を指すのだろう。後者のロイスが訳した

<sup>9)</sup> 霊交会教会堂図書室に残る『日本MTL』については前掲阿部「ゆくりなくも」を参照。本稿で引用した『日本MTL』『楓の蔭』は国立ハンセン病資料館所蔵分、あるいは後掲『編集復刻版 近現代日本ハンセン病問題資料集成』補巻 18、19 掲載分を利用した。

詩集は、「Voices from THE CHRISTIAN POETRY CLUB at the HOSPITAL FOR LEPERS OHSHIMA, JAPAN」として編まれたアンソロジーで、大島でなく長島愛生園図書室で唯一みつかった文献である。同書は、ニューヨークで1941年12月から1945年12月までのあいだに刊行されたこととなる。

ロイスからの手紙の訳文が掲載されてから半年が過ぎた1946年12月発行の『楓の蔭』第183号(活版)には、「信仰の父/エリクソン博士逝く」が掲載された。そこには、「終戦後、同夫人からの長文の手紙が届き、長田穂波著の「燃ゆる心」を英訳出版され非常な好評を呼んでゐると伝へ、「日米両国は戦争はしたが、宗教には国境はない」と温かい同情を寄せ訪日の希望を洩らした」と記されていた。さきの書簡訳には戦争と宗教についての記述がなかったから、ここにいう終戦後に送られた「長文の手紙」は、さきに『楓の蔭』に掲載された手紙とはちがうのかもしれない。ともかく宣教師エリクソンが亡くなり、その妻からの書簡が想起されたところで、ロイスの英訳詩集として穂波の『燃ゆる心』が思い出されても、大島の人びとの詩華集<sup>アンソロジー</sup>ははやくも忘れられたようなだった。こうした忘却は、いまのところ大島でSouls Undauntedがみつからないようすと通底しているのかもしれない。

ロイスの手紙の訳文が載った『楓の蔭』第175号(1946年3月)には、三豊奨健寮生が編んだ「穂波追悼」読后感集も掲載されていた。おそらく香川県三豊郡にあったこの寮は、「肺病」(結核)療養所かもしれない。そこから寄せられた9名の読后感想文は、「穂波追悼」についてである。『楓の蔭』紙面は、穂波と島外のさまざまな人びととの交流のようすを伝える媒体となっていた。穂波の死は、『楓の蔭』紙上でどのようにあらわされたのだろうか。

さきにみた、大島で手づくりの回覧誌としてあった『青松』の第17号(1946年1月)は、「長田穂波追悼号」として編集されていた。その編集を担ったとおもわれる土谷勉が記した「あとかき」には、「本巻は場合によつたら全部といふ訳にもゆかぬらしいが、MTLの方で印刷して下さるかも知れぬ由(林博士談)。これもひとへに長田兄のことだからである」とみえる。林とは、大島青松園に勤務する医官の林文雄である。穂波と日本救癩協会とのひとかたならぬつながりが、大島に伝えられていた。

大島の霊交会によって発行された『穂波追悼』という活版印刷の小冊子(奥付に記された著者兼

発行者は石本俊市、1946年3月16日発行)には、「彼〔穂波〕の発表した最後の論文は園内回覧誌青松十二月号の「新日本建設と青松園」であります。これは〔中略〕日本救癩協会「楓の蔭」誌二月長田穂波追悼号」で読めるとの告知があった。この『楓の蔭』1946年2月号は現在、その所在がわかっていないが、さきにみた『青松』誌上での予期はすぐに実現したのだろう。1945年12月に穂波の死があり、翌1946年1月に『青松』の穂波追悼号が発行され、翌2月号の『楓の蔭』がまた穂波を追悼する号となったとなると、これは穂波の死へのかなり迅速な対応だったといつてよい。

**『楓の蔭』の遺稿** 穂波の歿後に『楓の蔭』に掲載された穂波の文章をあげておこう(以下～の遺稿はその全文を本稿に転載)

長田穂波「新日本建設(二)青松園の場合」『楓の蔭』第176号、1946年5月1日、ガリ版。この稿は、穂波追悼号となったという2月号の続編だろう。さきの引用にあったとおり、この元稿は大島で回覧されていた手書き版『青松』第15号(1945年12月)が初出となる。ただし『楓の蔭』掲載版は原典のままではなく、抄録であり、まただれによるかは不明だが改稿がおこなわれている。『楓の蔭』紙上では二分割掲載で「了」となり、稿が閉じられたすぐあとに、「本文は昨年十二月十八日急逝された長田穂波氏の最後の力作となつたものである」と附記されていた。この『楓の蔭』掲載抄録版と比較するために、初出である『青松』第15号掲載の元版と、同誌第17号穂波追悼号に掲載された抄録版も本稿末尾に収載する。

長田穂波「天に録されゝ歌」<sup>(ママ)</sup>『楓の蔭』第177号、1946年6月1日、ガリ版。ここにも附記があり、これは穂波が亡くなる直前の12月9日におこなわれた礼拝での「講演の一部」の原稿だという。本文冒頭は、「今日、先日亡くなられたT姉の追悼礼拝であつて」と始まる。さきに参照した石本の文章をここであらためて中略することなく引用すると、「彼の発表した最後の論文は、園内回覧誌青松十二月号の「新日本建設と青松園」であります。これは十二月九日彼最後の聖日の故鉄林姉追悼説教「天国の讃歌」速記と共に、日本救癩協会楓の蔭誌二月長田氏追悼号に掲載される」とあった、「天国の讃歌」の速記録である。1946年6月発行の『楓の蔭』への掲載は、再録なのか、まえの号に掲載できなかったからなのか、それは不明。

長田穂波「とかげと私」『楓の蔭』第181号、1946年10月1日、活版。

これには、「長田氏が永眠されて遺稿の中から出たもので未発表の随筆であります」の附記。

長田穂波「我らの立場から」『楓の蔭』第184号、1947年2月1日、活版。

これには「遺稿」とのみ紹介。

長田穂波遺稿「癩者としての哲学」『楓の蔭』第188号、1948年6月1日、活版。

論題、執筆者名のあとに、本文よりいくらか小さい級数の活字で、「「癩者としての人生哲学」こうしたことが云ひ得らるゝや否やは別として、事実の上より論じてみたいと思ふ」の1文がある。この論稿は、かつて『藻汐草』第12巻第10号通巻第106号(1943年11月)に掲載された「随筆 松籟海鼓(癩哲の巻)」の転載である。したがって、正確には「遺稿」ではない。冒頭の1文も、穂波の書いた文だった。「癩者としての哲学」とは、再録にあたり本文冒頭と末尾ちかくに2回記された「癩者としての人生哲学」をふまえてつけられた論題であり、しかもここでは『藻汐草』掲載版の抄録となっているのである。『楓の蔭』紙上では、件の「つれづれの御歌」にふれて「皇室中心主義」の日本人であれば「祖国浄化」に生きるべきだとの決意を述べるくだり以降が削除されてしまった(ただし抄録部分にも「祖国浄化」の語がみえる)。敗戦国日本という事態をふまえた所為なのだろうが、このいわば戦前の抹消とともに、生活の場からの「新生」を展望することが「我が哲学」との主張も切り取られてしまった(ただし抄録部分にも「新生」の語がみえる)。元稿の刊行から4年半を経たところで、あいだにはさまる敗戦を体験したうえでの改編である。

そして、同紙第231号(1951年2月1日)には、穂波の遺稿選集第1巻として刊行された『福音と歡喜』(聖約社、1950年)の出版案内が掲載される。

**遺稿選集** 『福音と歡喜』は、刊行委員を、石本俊市、原田義太郎、藤本正高の3名が担い、編輯者は藤本、発行所は神奈川県川崎市溝ノ口局区内馬絹、1950年12月18日 穂波歿後5年の祥月命日に発行された。刊行委員兼編輯者である藤本による「後記」をみよう<sup>10)</sup>。

長田穂波兄は昭和二十年十二月十八日に昇天されたので、本年は五周年にあたる。その記念日も近づいたとき本書が出版の運びに到つたことは悦びにたへない。本書の自序にもあるように召される一年数ヶ月前に、本書の出版を企図していられたのであるが果さなかつた。其後故林文雄博

10) 藤本については、阿部安成「史料紹介 長田穂波の痕跡 - 療養所の生のあらわし方」(『ハンセン病市民学会年報2008』2009年)で少しだけふれた。

士の手によつて編輯されて某書店より出版される筈であつたがそれも実現されなかつた。／私はこの事を長田兄のみられた大島青松園の靈交会（基督者の団体）を長田氏に代つて指導してゐられる石本俊市兄より聞き、何とかして出版したいと方々書店に交渉したが、どこも引受けてくれなかつた。しかるに此度高松市に在住して度々青松園を訪問して癩患者を慰問していただける原田義太郎氏が出版費等を引受けて下さることになり愈々出版されることになつたのである。／なほ本書に収めたものは長田兄が靈交会の集会で患者に語られたものの一部である。言々句々、病者が病者に、その痛ましい体験から溢れる神の恩寵を証したのであつて、生命の血汐が脈搏つてゐる。なほなるべく多くの人に読んでもらう為に分冊にした。同兄の遺稿の第二巻、第三巻を更に続いて発行することが出来ればと願つてゐる。

1950年11月9日付のあとがきである。刊行委員に名をつらねていた原田は、大島への慰問をくりかえす篤志者なのだろう。難航していた穂波の遺稿集出版は、彼の出資によって可能となった。だが分冊にしたという遺稿選集の第2巻、第3巻は発行されなかつたとみてよい。この遺稿選集第1巻はいまも靈交会教会堂図書室にたくさんあるが、続巻はまったくない。

穂波による「自序」をみよう。

福音は爆発力である。福音は活殺剣である。余の信ずるキリストは決してお人好しではない。地上主義に対し、人本主義に対して常に火の抗議を發している！／福音とは抗議の火をもて燃焼し尽した跡に、全く新しく建設される、天上的生命生活の実現である。故に余にとつて福音は活ける靈動の社会顕現であつて、決して悟諦の道義では無いのである！／抗議の剣に殺されて罪より解かれ、福音に救はれて新生する……そこに神的歡喜が自ら湧き出る。是れこそ『永生の喜悅』であつて十字架の秘訣である。……余は是の三つを指して神の福音と信ず。その何れの一つを欠くも全からずと為すものである。／余は名誉もなし元より財宝もない。併し余自ら頂きし恩寵の事実がある。これがわが遺産であると信じて、こゝに書き留めるのである。或は後世の人を些か益すれば望外の喜である。／人あるひは神学的に評せんか、余は神学者に非ず、説教学的に見て嘲笑せんか、余は宗教家に非ざるなり。たゞこれキリストを信じキリストに活かされし一介の病、一平信徒の記録たるのみ！

「自序」の日付は1944年7月25日となっている。だが、この「自序」との表記も穂波自身が記し

たかどろかは不明であり、また、どういった内容の著作の「自序」として書かれたのかもここからはわからず、この「自序」だけでは1944年時の穂波に出版の構想があったと確定するわけにはゆかない。この自序の日付は、すでに1940年に霊交会機関紙『霊交』が廃刊となり、ついで園内発行の総合誌『藻汐草』も1944年6月に休刊となったその直後の時点である。藤本の言を信用すれば、園内での活字刊行物の発行が断たれたところで、自著の刊行を決したとなるのだろう。藤本は、「本書に収めたものは長田兄が霊交会の集会で患者に語られたものの一部」だという。それにみあうように、収録された23編の遺稿のなかには、「昭和十三年一月元朝礼拝にて」(「恩恵より恩恵へ」との附記があったり、「今朝は聖書についてお話を致したいと存じます」と始まる話(「聖書の権威」)があったりする。この遺稿選集第1巻は、出版する予定でまとめられたまると1冊が未完のまま遺稿となっていたのかもしれないが、個々の1編は、必ずしも公刊を予定しながらそのままになっていた原稿というわけではないだろう。やはり、穂波の「自序」にみあう文章が、その趣旨にしたがって編まれたかどうかは確かではないのだ。

本書に巻かれた帯には、「癩病という悲痛な病にさいなまれつつも著者の靈魂は福音による歡喜にあふれていた。その喜びを同病の友等に語つたものを集めたのが本書である。癩詩人の中よりほとばしり出た生命の言葉は、如何なる人をも希望と歡喜におどらしめずにおかないであろう」との文章があって、読者を誘っている。もちろん、これは穂波が記した宣伝文ではないだろう。書名の「福音と歡喜」にもっとも沿う文章が、この帯のうえにあるとみえる。これは信仰の書であり、「癩詩人」「島の聖者」(前掲石本「追悼感話」)と讃えられる穂波像にふさわしい遺稿選集ができあがったのだ<sup>11)</sup>。

こうした穂波像、あるいは遺稿選集『福音と歡喜』に寄せる感情が読者へも伝播する。藤本正高が編輯兼発行人となる逐次刊行物の『聖約』誌上には<sup>12)</sup>、くりかえし穂波の遺稿選集の広告が掲

---

11) 前掲土谷『癩院創世』の再版に収録された「再版に当って」においてこのときの霊交会代表は、「聖者」という讃辞に対して「偉大な人格者であり、愛の人だったとする記述からすれば、当然の尊称と受けとめるべきであろう」と評価したうえで、しかし聖書にのっとれば「神以外はすべて罪人であるということであり、聖人などいる訳がない」ので「聖ヨハネも反聖書的であり、敢えて尊称を用いるとすれば、パウロ先生でよいだろうし、ペテロさんでよく、また三宅さんや長田さんでよいということである」と述べている。ひとの讃え方に対する聖書に即く立場からの1つの異議もうしたてである。

12) 『聖約』の奥付には藤本の住所と聖約社の所在地が「川崎市溝ノ口局区内馬絹」と記されている

載され、その誌上「感想」欄に『福音と歓喜』への讃辞が寄せられている（『聖約』第112号、1951年4月10日）。

長田穂波兄の「福音と歓喜」についても、各方面から喜ばれている。塚本虎二先生から「氏の文には始めて接しましたが、古典的な強さをもち、珍らしく心に強迫を感じました」との御言葉を頂いた。また未知の方から「過日杉並に病む或る方からとても良い本であるからとお貸して下さいましたのを拝見してゆくうち、余りに素晴らし証、素振らしい記録に圧倒され、夢中で読んでしまいました。まことにこの本の初から終りまで生けるキリストが脈々と波うつて居ることを感じました。故穂波兄を通して生けるキリストが直接読む者に語り給うているかの様な感を深くさせられつつ、終まで夢中で拝見させて頂きました。自分一人でなく一人にでも多く拝読させておあげしたいと思つてお手数をおかけしてお送り願ました次第です」と云つてきた。其他各地の教友が紹介に取次に協力して頂き、感謝にたえない。なお長田兄のいられた大島青松園に於ては、医官や事務官の方が多額の献金をこの書物のためにして頂き、贈呈するつもりでいた患者の方々も購読して、第二巻が一日でも早く出るようにと云つて頂いていることをきき、感激している。紙なども次第に不自由になるようであるが、何とかして早く出したいと思つている。

刊行から5か月ほどの時点での、『福音と歓喜』に寄せられた応答である。穂波の神聖視あるいは神秘化は、大島では彼の歿後すぐに始まっていた。穂波の追悼号として編まれた『青松』第17号誌上がその祭壇となった。

**穂波の祝聖** 『青松』第17号をみよう。穂波の最期を看取ったのは、在園者で霊交会会員の河淵朝馬だった。彼は穂波を悼む座談会で、「亡くなられる最後までお祈りをされました。そして五分間ほど経つともういけなかつたのです。「長田さん、長田さん」と、一生懸命大声で呼んだのですが最う駄目でした。自分には長田さんがキリストをお迎へして昇天したやうな気がします」と、その末期のようすを伝えていた（「故長田大人語る座談会」）。

穂波の遺稿選集『福音と歓喜』に掲載された彼の遺影は、髭ののびた右顔の肖像写真である。そ

---

る。それは『福音と歓喜』の発行地と同一。『聖約』の表紙には「藤本正高主筆」との活版印字もある。霊交会での『聖約』の所蔵状況については、阿部安成・石居人也「無教会と愛汗 - 大島青松園キリスト教霊交会の2つの精神」(滋賀大学経済学部Working Paper Series No.121、2009年12月)を参照。



れをめぐって座談会では、「髭のことを先刻林先生が言はれたが、髭はある方が写真にしてよかつたと思ひますね」(斉木操)「死顔のきれいな事は昼寝の顔以上だつたと思ふね」(石本俊市)「たとへ宗教は異つてゐてもあの静かな死顔を見ると「昇天」といふ事を沁々思はされますね。キリストによく似てゐる」(斉木)「あの席で山谷さん(現霊交会員)とも話しのだが」(石本)「誰もさう言ふらしいね」(河淵)と話しがつづいた。聖なる昇天、キリストに似た面影という穂波の死が語られてゆく。

それはまた同誌上で穂波の死に献呈された歌にも詠まれ、座談会に出席した面々によって、「死<sup>デスマスク</sup>面君が気にせし<sup>ひげ</sup>鬚ありていよいよ<sup>たか</sup>崇く<sup>マ</sup>浄らなりなりけり」(斉木)「死の面イエスのみ像さながらに祝福されし君を言ふかも」「伸びしひげそのまま撮りし死顔の浄らかになして触れがたきかも」(小見山和夫)と、穂波とその死が清らかに崇められたのだった。

穂波の死をめぐってまとめられた文章では、あらためて、「長田さん長田さんと叫んでもゆすつても返事がなかったと云ふて淵崎兄は泣かれる。寝てゐても死んでからもその顔はエス様と同じやうだったと繰返し繰返し云はれた」(林文雄「臨終前後」)とまとめられる。ここにいう「淵崎」については、だれの手によるのかは不明だが、その数行まえで、「河淵」と手書きで訂正されている。さきの座談会で穂波の最期を語った在園者である。この座談会記録をふまえて厳密に言えば、河淵は穂波の昇天のようすを報せたのであって、キリストに似ていたとは語ってはいなかった。座談会でも斉木や石本の話をつけて、だれもがそういうと応じたにすぎない。

園長の野島泰治が寄せた穂波への追悼文では、「十八日の午前二時眠るが如く逝つた。時たまたま電灯の停電した事は、この偉人の死を悼む自然の弔号であつたかとも思はれる(「偉人「長田穂波」)」とその感慨がまとめられた。野島はのちに、霊交会創立五十周年にさいして、穂波を軸に霊交会をふりかえり、彼の末期を「死後の長田氏の写真が適度に髭があつて、画で見るキリストそつくりであつたことも、不思議なことであつた」と回顧している(「霊交会五十年記念に寄す」『霊交会 創立五十周年記念誌』霊交会、1964年)。髭にも停電にも聖なる意味が与えられたのだった。穂波の聖別、あるいは祝聖である。だが、穂波は「癩詩人」や「島の聖者」としてのみ生きたのだろうか。

**自己止揚** 穂波の遺志のとおりか否かはともかくも、遺稿選集第1巻となった『福音と歓喜』は、1944年7月に記された穂波の「自序」に沿う装いをみせ、信仰の場で穂波が施した講話が収録さ

れていた。ただ、この「自序」での穂波は、キリストへの信仰とその恩寵を梃子として「新生」しようとしているようにみえる。もとよりあと1年半ほどの余命を知るよしもないだろうが、信仰を手放さず、しかし、「神学者」でも「宗教家」でもない「一介の病、一平信徒」としての新しい生への転身、生まれかわりへの希求がうかがえる。これを穂波の化生(transformation)とよぼう。「自序」に記された精神からすれば、この遺稿選集第1巻は「福音と歓喜」ではなく、むしろ「福音の抗議」あるいは「福音による新生」とすべきだったようにおもふ。

こうわたしが判断する根拠は、戦争そのものと、戦時下の療養所という2つの体験をとおして、このときの穂波は自己を大きくかえようとしていたとみるからである<sup>13)</sup>。『楓の蔭』に掲載された穂波遺稿は、いつころの執筆だったのだろうか。それらの執筆順序は、まずもっともあとになる稿が「天に録されよ歌」、そのまえに「新日本建設(二)」がありいずれも1945年、そのまえの時期の1943年の稿として「癩者としての哲学」(『藻汐草』1943年11月号掲載の元稿には1943年9月末日付の「附記」がある)があり、「我らの立場から」は、「癩予防法案設立当時!!」の説明を今に繰り返して居るに過ぎない向さへある、希くば三十余年の長い間、身命を賭し幾多の犠牲を以て為されし研究と事務と教養の結果」の記述から、「癩予防法案設立当時」を1907年公布の「癩予防二関スル件」のころのこととすると、それから30年あまりとなれば1930年代末のころとなろう。「とかげと私」はほかの4稿とは内容がかなり異なり、おおまかな推測をするよりほかはないのだが、おそらくこれらのなかではもっともはやい時期の稿となるのではないか。これらに遺稿選集第1巻の「自序」もくわえると、「我らの立場から」「癩者としての哲学」「自序」「新日本建設(二)」「天に録されよ歌」の順に執筆されたとならべられる。

さきに示した、遺稿選集第1巻の「自序」なる文章や、『青松』に掲載された論稿をもとに考察した穂波の化生というわたしの判断は、この『楓の蔭』紙上の論稿をとおしてつかまえられる穂波についてもあてはまるとおもふ。あるいは、『楓の蔭』紙上の穂波の遺稿をふまえると、わたしの判断はいつそう確かになるともいえる。

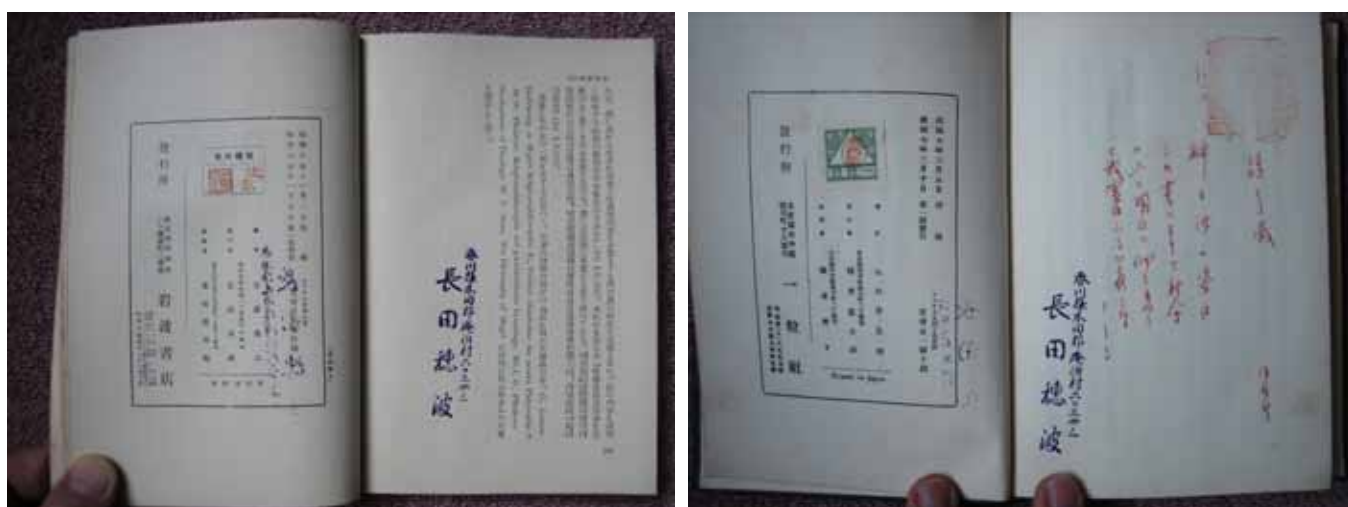
1930年代末に執筆したとおもわれる論稿「我らの立場から」は、「慈善」も「同情」も拒み、「隔

---

<sup>13)</sup> この穂波の変容については、阿部安成「癩と時局と書きものを - 香川県大島の療養所での1940年代を軸として」(黒川みどり編『越境するマイノリティ』仮題、解放出版社、2010年刊行予定)で論じた。

離さるゝ者」と、その彼ら彼女たちがいう「社会」とを、「相互に担ひ合ふもの」との関係におくところが「我らの立場」であると説く。みづからを慈愛や仁慈と隔離の客体とするのではなく、療養所外のものたちとともに協働する主体と唱える主張は、1つの大きな転身宣言である。つぎの1943年執筆の稿を改編した論稿「癩者としての哲学」で穂波は、「新らしき自己へ止揚する」とその哲学を示した。ここには、「解脱」「止揚」「剰余価値」といった語が用いられて、「癩者」である穂波の哲学が開陳されている。仏教の教義や、ヘーゲルとマルクスの思想のことば、そして「祖国浄化」という国家のことばをめぐる思索と理解をもとに、穂波はそれらを「癩者」が療養所から発信する世界のとらえ方とそこでの生き方の才につくりかえたのである。

穂波は療養所でヘーゲルやマルクスをめぐる議論を読むものでもあった。霊交会教会堂図書室にはいまも、穂波による赤傍線が引かれたり書き込みがあったり、また、穂波の蔵書印が押されたりした書物があり、それらのなかに、国際ヘーゲル聯盟日本支部代表者近藤俊二編『ヘーゲル哲学解説』（岩波書店、1931年）と矢内原忠雄『マルクス主義と基督教』（一粒社、1932年）がある（これら2冊のどの箇所に傍線が引かれていたのか、どのような書き込みがあったのかは、ここでは省



略する。上記写真の左が『ヘーゲル哲学解説』、右が『マルクス主義と基督教』。穂波はキリスト教の教義にはないことばを活用しながら、そのうえで「宗教の力」に拠って、「祖国浄化」という国是を遂行するために、療養所に「遠ざけられし者」である「癩者」を「生ける屍」ではない「自己肯定」しうるものへと転身させようとしたのだ。「新らしき自己へ止揚」する穂波を、わたしは彼の「化生」とよんだのだ。

かつて「癩者は「いとわしい重荷」」にほかならなかった。社会と血族は癩者を療養所へ遠ざけ、

癩者もまたみずからを社会や血族から隔てることを受忍した。だが、「社会及血族が癩者を全く葬れな」かった。同様に癩者たちも「呪ひつゝも呪ふ社会へ、恨みつゝも恨む血族への愛着は断ち切れな」かった。こうした病体を排除しきれない、愛慕の情を切断しきれないようにすを穂波は、「否定しきれない自他が他へ希望を残してある」といいあらわした。社会と血族も、癩者もまた束縛や苦悩から解脱するところに「新生」があり、そこを拠点とした「新らしき自己へ止揚」する地平を穂波は展望したのである。このとき穂波は、さきに見たとおり「宗教の力」に期待し、それへの望みを抱いていた。ただし、それをキリスト教にはかぎっていない。すでに霊交会の機関紙『霊交』が廃刊に処せられていたこのとき、「役所」による刊行物誌上(『藻汐草』)であるという執筆の場への配慮があつたのことともいえる。穂波はキリスト教信仰を捨てたわけではなく、1945年12月9日に礼拝をつとめ、その感話も残している。

ただそこでもくりかえし述べられた「魂の更生」「甦生」の語は、日本の「敗残」という事態をうけて発せられていて、「福音」を「抗議」や「新生」への梃子として活用しようとした1944年の穂波を元として、そのときの自己をさらにべつな次元へとすすめているようにみえる。なにより、「敗戦」を契機として「新日本建設と青松園」のゆくえをみさだめるために執筆された「新日本建設(二)」とその初出稿において、キリスト教への信仰はほとんどあらわれていないのだ。「戦時体制」下の1943年の時点で『藻汐草』に掲載された「随筆 松籟海鼓(癩哲の巻)」においては、「皇室中心主義」の「我ら日本人」は「国家主義的観念に精神も生活も凡てを止揚する事」、かつ「霊的」であることと科学に拠る「哲学」を表明していた。日本と青松園の「新生」を論じる1945年末の穂波は、自治へといたる規範としての「道德」と「愛国の至情」とを「人格的再建」の根幹としたのである。

穂波が遺したこの「愛国」の念は、彼の死によって、穂波のなかでどのように醸成してゆき、彼をどのような療養者としていったのか、それを知ることができなくなった。ほかの在園者に継がれた形跡もない。穂波の思念そのものが、だんだんと大島では忘れられていったのだから。



**『楓の蔭』収載、穂波遺稿**

(誤記もふくめて原文のまま転載し、必要に応じて読点をうち、/は改行をあらわす)

**新日本建設(二) / .....青松園の場合..... / 長田穂波**

扨て青松園と雖、国家の一細胞として真の自由主義に徹し人格的に確立する時、自発的に向上の道に進み得るのである。許されし範囲に於て「我らの社会」を理想化し得るのである。

かくて新日本建設に寄与する為に人格を養成し、上下一心、真の自由主義、理想境建設に協力邁進すべきである、狭き島を広く住み、惨な運命を明朗に、無益な生存を有益に更生するのである。道は近し。当局も病友も「人格的再建」の一途のみである。

日本従来の官立社会事業はその性質よりも組織を偏重してゐる。官立の弊は難しき規定と複雑な手続である。青松園のみでなく大学さへ同様であつて、そこに病院も大学もなく、たゞ役所があるのみである。「役所気分」が濃厚で、凡てが官僚的である。療園であつて病院が役所か解らない。看とるものと病者でなく、官吏と患者では親和の情は結び難いのである。

武家時代から叩き込まれた「役人は威張るもの」との観念に対し、民衆には反動精神として「下克上」の色彩があり、反抗するのを快とし英雄的であると思つてゐる。青松園患者に果して斯る思想はなきや否や、敢て問ふ？

この心はことごとくに当局を疑ひ、その方針に不服を唱へる。かゝる下克上の精神では、当局と手を採つて進むことは出来ない。

我々はこの新発足に当つて深く反省し、頭を切り代へて進まねば、鬭争は来ても真のデモクラシーは青松園の前途に期し難いと信ずるのである。

協和会も多分に官僚味が染みついてゐる。「何々をやる」と言ふ場合に何かおどし文句が附いてゐる。最近の例は「背く者には配給品を与へず」と言ふ如きである。これは会員全体の恥である。個人の人格が恥かしめられるのである。併し若し自分が詰所に立つてやるとすればどうか？矢張り言はねばならぬ、「守らぬ者には配給をなさず」と、無理もない。斯る悲しい恥しい宣言をどうしてもしなければならぬ我らの状態でないか。協和会の実相でないか。その結果自づと詰所は官僚的になる。

実際総代は敬遠せられる。親しまれぬ。選び出した代表を煙たがるではないか。この隔りとなるのは会員の公衆道徳の欠陥ではないか。詰所は協和会の代行機関〔判読不能、初出誌では「である故にこそ選挙」〕制であつて、決して天降り式ではない。この代行者に反抗しないまでも、その目を盗んで悪行為をなし、又種々詰所を比難するのである。八釜敷言はぬからとて常識でも解り切つた悪い事をする。これ公衆道徳の欠除である。かくて詰所は全般の幸福のため、心ならずも命令し、又我儘者に配給せずと、鞭を振り上げてかゝらねばならなくなる。協和会員の資格は何ぞや？ 会員道徳である。この会員道徳こそ、青松園に真の自由主義を来らしめる基本生命である。この自覚と認識なしに、青松園の新発足は覚束ないのである。

選挙の度に「あひるの卵だ」との声を耳にする。即ち、選びし責任を忘れる事である。自分が信賴して依頼した人に対しては協力と親和をもち、事業の完成に責任感を<sup>〔判読不能〕</sup>「 $\equiv$ 」たねばならぬ。〔この1文判読不能、初出誌では「是れを会員道徳と言ふ」〕徒に要求の声のみが高<sup>〔判読不能〕</sup>「 $\equiv$ 」からは、非人格的言行を為しつゝありはせぬか。

思へば規約とか組織とかは衣である。中身が立派でなければ猿芝居に過ぎない。希くば会員として会員道徳に活きんことを。

更に進んで我らは「会の面目」を保つべしとの自覚を盛にすべきである。畑作荒し、大島神社や仏前の供物荒し等々の噂……勤労者配給に対する眩き、役員待遇への不平等々の風説は会員自ら傷つけることである。別して国禁に触れる言行、園職員に対する非礼、治療材料の無断持出し、慰問者に対する無作法　かゝる非難があればそれこそ協和会の面目丸つぶれである。道徳的欠乏によつてその社会の健全性は失はれ、社会制裁は力を失ひ、我儘放縦が助長され外部から見下げられる。道徳的不健全な社会は、常に解体の危機を孕む、若し協和会解散の如き声が起らば、そこに会員各自の道徳的欠陥を注視しなければならぬ。

協和会の功績は決して僅少でない。嘗て今は亡き池田補導部主任が云はれた「協和会なくば会館程の監禁室ありとも今日の和平を望み難し。」と、この言は長年の御苦勞と経験から權威がある。協和会が固平和を保ち、会員生活の幸福を増進する事は、言語に尽し得ぬ程である。

若しそれ協和会を否定するものありとすれば、それは極端なエゴイストか、然らざれば反逆乱闘を好む悪魔の同類である。健全な会員は一人として協和会の重要性を否まぬであらふ。



人格的完成は人格的働きとなつて現れる。特に生ける屍たる癩者にとり、他の病者に勝つて働き得る事は幸福なことである。一度特定室に臥す身となつてみて、作業を為し得た時代の幸福を痛感するのである。この人格的働きの最高善なるは奉仕である。自己の慾のみのために働くのは卑しい。デモクラシーの真髓は奉仕である。これなしに新日本の前途に光栄は約束されない。会員は作業に於て、又特に役員はこの奉仕の精神に立たれんことを！こゝにこそ又各自の生き甲斐を見出すのである。

一方我々は特定室を善くせよの声に耳を傾くべきである。一部のものはこれを嘲笑するが、この主張は決して今在る弱者のみのためではない。今軽症で働く人も必ず弱くなる。その前途を善くしておくことは、憂なく現在に充分働き得る道である。今の奉仕者の前途の備である。弱者が働かずして過大なる要求をするのは、権利の悪用であるが、且て働き奉仕した人への待遇は、必然の問題である事に心を致さねばならぬ。

我が愛国の至情は赤裸である。上に向つても病友に対しても真情を吐露せざるを得ない。

或は盲言を責むる向もあらん・・・よし責めらるゝも、新日本の青松園が前途の名誉と幸福とを希ふ火は燃えて止み難い。

敢て諸兄姉各位の熟読反省を伏して乞ふ次第である。/(了)/ (本文は昨年十二月十八日急逝された長田穂波氏の最後の力作となつたものである。)

### 天に録されゝ歌ノ長田穂波

今日、先日亡くなられたT姉の追悼礼拝であつて、同室二十六号の姉妹たちの希望により聖日礼拝と共にしたのである。姉は回春病院で入信後、本園に来られ、霊交会員として二十三年間信仰の生活を続けられた。

私はこの会堂で日曜学校を続けて来たが、T姉は美しい声で讃美歌の指導をして下された。姉としても淋しい時、退屈な時に歌つた歌もあらう。

然しその魂の底から天を仰いで歌はれた歌は、正に天に録される歌であつて、その歌は天使の歌ふ歌となつて故郷に帰りゆくT姉を迎へるのである。我々の歌も単に娯樂であつてはならない。気まぐれであつてはならぬ。T姉の讃美歌の如く天に録される価値あるものであれ。天使がその歌

をもて、我等を迎ふる程のものであれ。

我々は歌ふ。然し歌はせられるものは更に幸である。即ち歌はずに居られなくされるのである。肉体の喉は壊れても、眼は聖歌をよめとも、溢れくる讃美が胸に歌はれる。それが本当の歌である。

そのためには魂の更生が必要である。魂の生れ代りなくしてかゝる霊の歌は歌はれぬ。人の耳には聞へなくても、天使が耳を澄ます歌は歌へない。この甦生は血に関するものである。この血液は何を意味するか。出生を意味する。生産し得る資格を得て出血がある。資格を失つて更年期に血は止る。これは神秘的な啓示でないか。新生の条件に血が必要なのである。

魂の誕生には十字架の血が必要である。十字架の血潮のないところに新生はない。

月経は人に嫌はれる。汚れであると云はれた。十字架は同じくいま汚しきものと世の人の目には見える。

巴里の国立劇場の地下室には、世界の音楽家のレコードが保存されてあると云ふ。その中に日本人のものがあるかどうか、私は知らない。いづれにせよ、音楽家最高の名誉とせられてある。然し更に大なる名誉、否、比較にならぬ栄誉は天のレコードに録さるゝ事である。地につけるものは総て空しい。昨日まで天下に号令したのも、今日は戦争犯罪人として繋がれる。昨日の帝王は今日の敗惨の頭を地にかゝめるのである。

眼をあげて天を見よ。朽ちぬ永遠なるものを見よ。そして尊き神の子の血潮に潔められたるもとしてT姉の如く、天に録さるゝ歌を歌ひつゝ進まうではないか。

手袋を傍の椅子に追悼会

愛誦の讃美歌を / いま冬の薔薇

ゆくてはたゞ聖手の / まにまに冬の薔薇

(本文は長田兄が力をこめての講演の一部であつて、その溢るゝ力の半も現はし得ぬのは遺憾である。この山上教会は海からの寒風に曝されてあるが、姉と同室者の参加もあり三十二名が出席した。姉の愛誦二七九番「主よみてもとひかせ給へ」の歌声は堂に充ち、高い潮騒ひも打消し、天の和気は皆の胸に溢れた栄光そのものであつた。長田兄が召される十数日前、昭和二十年十二月九日の礼拝の要旨である。)

**とかげと私 / 長田穂波**

大分前の事ですが、私は島の横穴で聖書を勉強したり、お祈をしてみました。

御飯を食べる時と寝る時だけ寮に帰ります。あとは朝から晩までこの穴に入りきりです。そう六、七年も続いたでせう。よく食事を忘れてたり、夜の更けたのも知らずに居ることもありました。風の日は平気でしたが、雨の日はびしょびしょになつたこともあり、又夏は暑くてつい書物に面を伏せて眠つて了まひ、書物もノートもクチャクチャにして了つた事もあります。祈り勞れて夜をふかし目が、さめてみると体が霜で真白になつてみた時は驚きましたね。

ある時、ふと穴の横を見ると四、五糎ばかりの小穴が私の方に向つて開いてゐます。入口には苔が青々と生えてゐる。探つてみると私の穴の近くまで通じてゐる、何の穴だらう、蛇かしらん、それとも蟹かな。

翌日私が、いつものようにそこで祈り、静かに讚美歌「われらも愛せん愛のみ神を」と歌つてみると、ひよこりその穴から顔を出したのがあります。トカゲだ。ハハア、トカゲの穴だつたのか。私は歌をやめて暫くこの可愛い同居者を見つめてみました。

それから一ヶ月たつて、私が小声で歌ふと、隣の穴の主人公は必ず出てきて聞いてゐるのに気がつきました。高い声で歌ふと逃げて行くのです。三ヶ月たつて少し位大きな声を出しても逃げぬどころか、本を読んでゐると私の穴へ来て遊ぶやうになりました。

夏も過ぎて初秋になりました。トカゲとお友達になつて七ヶ月です。今では私の膝の上で遊び、体を動かした位では逃げなくなりました。

或日彼が蠅を捕へて食べるのを見て何か悲しい気持がしたので、低い声で叱りますとコソコソ自分の穴へ入つてしまひ、その日はいくら小声で歌つても出て来ませんでした、ハハア可愛がる声と叱る声とを聞き分けられるのだなあと感心しました。

又こんなこともありましたよ、夕方私の穴へ行つてみるとトカゲ君の姿が見えませんが、小声で呼んでも出て来ません、耳を澄ますと何かガサガサ云ふ音がします。ふと見ると十米許り向ふの草むらで二匹のトカゲが、はげしく戦つてゐるではありませんか。いき使ひも荒く、紅い口を大きく開いて食ひ合ふのです。二匹とも同じやうで、どちらが倒の隣の主人か判りません。私は思はず「中止」とどなると一匹は大急ぎで遠くへ逃げて後を振りかへつてゐる。今一匹はどうでせう。私の足

もとにすりよつて来て、私を見上げてみるではありませんか。私は低い声で「けんかしてはいけな  
いよ……サアお帰り」そう云ふとガサガサ走つて自分の穴に入り、半分体を出してハアハア云ふて  
ゐましたが、余程疲れたと見えて間もなく眠つて了ひました。

次の年の五月、療養所拡張工事の地均しで、私の穴も、トカゲ君の住居も崩され、あと形もなく  
なつて了ひました。私は空いてゐる室を探しては通つて勉強しました。でも折々はトカゲ君はどう  
したらうなと思ふことがありました。

又秋になりました。或日、読書に疲れ、海岸近くを散歩してゐました。ふと頭の上の崖の岩角に  
二匹のトカゲが遊んでゐるのに気がつきました。何とも云へぬなつかしさが胸にこみ上げてしまし  
た。私は崖に近づいて行きました。高さは二米以上もあります。二匹のトカゲは私を見下してゐま  
す。

「オイオイ」私は細い声で呼びました。一匹はあはてゝ一米許り退きましたが、今一匹の方はぐ  
つと頭を傾けてゐます。私はいつもよく歌ふ「われらも愛せん」を静かに歌つてみました。すると  
どうでせう。いまのトカゲは身をひるがへし、岩角から私の上に落ちてきたではありませんが。

私は、嬉しくて耐へられずつい強く触りすぎたかと思ふと、あはてて崖を這ひ登り前の崖の上か  
ら又ジツとこちらを見つめてゐました。

私は、このなつかしい友達の姿を仰ぎ乍らいつまでも讚美歌を口づさみました。

長田氏が永眠されて遺稿の中から出たもので未発表の随筆であります。

## 我らの立場から / 長田穂波

「救癩」と云ふ事は既に語り厭き、聞き飽きたやうであつて、未だ語り尽さず、聞き尽してゐな  
い有名なる問題である。この問題は癩者自身にも、亦社会一般にも充分理解されて居ない。加ふる  
に従来の説明が甚だ旧式であつて！！癩予防法案設立当時！！の説明を今に繰返して居るに過ぎな  
い向さへある、希くば三十余年の長い間、身命を賭し幾多の犠牲を以て為されし研究と事務と教養  
との結果を科学的、組織的に発表すべきであると思ふ。かくて社会人心をして確固たる「救癩智識」  
を把握さして欲しいものである。斯くした努力を払ふ方が現れて、同胞をして癩に関する相当に突  
込んだ観念を啓発して頂き度く祈るものである。

救癩問題の内容を社会的と治療的との二大別する事が出来ると思ふ。前者としては国民保健問題、血族解放問題、療養所経営問題、等々が含まれる。然して国民保健問題は国家の政治法律に関係し、血族解放問題は同胞の道德及感情に触れし事であり、療養所経営問題は癩者の自覚及教養に関するものであらう。

特に困難な問題は！！永い時代の迷信にからまる血族解放！！この解決であらうと思ふ、是は余程明瞭なる「癩は伝染なり」と云ふ証拠と「遺伝せず」と云ふ。実験的理解力とを与へざれば「菌が居るから」等と漠然たる言では迷信の礎は崩れない、又社会の感情は好転するものではない。斯る意味に於いて従来如き運動方法には、大した期待はかけられないのである。

今後は一段と科学上の確証と道徳的昂揚とに待たねばならぬと思ふものである。

療養所経営問題に於ても実際問題となると、さう簡単に行くものではないのである。経営その宜敷を得ざれば、火の粉を社会の懷中に埋めかくす結果を生じないとも言はれない。故に科学的にか愛火的にかの議論が生ずる。

無理解なまゝ束縛して置くべきか、国民としての自覚の上に起たしむべきか！！癩となりし者を動物視すべきか人格視すべきか！！この岐路的感情に立つて幾百万の者が、ひそかにうかゞつて居るのである、

若し斯の理念の相異によりては、『療養所職員』に対する内外の感情も大差を生ずる事は、自ら明白である。悪くすると尊き犠牲者が無駄なものに評価される事なきにしも非ずとさへなる憂ひが含まるゝのである。故に療養所経営は救癩問題の内容として、最も重視すべき必要がある。

若し純社会問題として取扱ふ時、余程の注意を要すると思ふ。救癩問題なる「題名の説明は何と為すべきか」若し単なる癩者本位の慈善事業ならば、我らは或は是を拒むかも知れない。否、こばむ者は尠くないであらう。然らば発病によりて国家の邪魔物視せんか、今迄も否、現に国民としての義務をはたしつゝある者に非ずや、特に発病により邪魔物視さるゝと云ふ事は、一般国民思想上まことに由々しき大問題となるであらう。かく考え来ると「題名の義解」さへ中々の事でないのである、

されば社会は我等の不安を取去ると考へると共に「隔離さるゝ者と社会」との離るべからざる相互に担ひ合ふものの存在を深慮して、そのになひ合へる理解に於て明朗な道を通ぜなければならぬ

と思ふ、

さて後者の医療的問題としては、先づ療養所と研究所とを如何に考ふるや、現在迄の経験より言へば、療養所と研究所と業務には無理があると思はるゝ。癩園の職員は毎日患者の臨床診療のみにも多忙に過ぎて居らるゝと見受らるゝ、此上に専門的研究など求むるは酷である。特に精神労務なるに於てをやである。よし医療及研究設備がたとへ完備したとしても、現在の実状に於ては医師は健康を失つて過労の為に倒れるであらうと思ふものである。

然るに癩学会に於て各療養所が相当の成果を納めて居らるゝと承る事は、敬服の外はない。従来、癩研究者少しの理由には、成功の遅きと其間の生活保証の無きにあると聞く。現に医学校多し、然れど癩医志望果して幾人ぞや、日本医能凡ならず、唯腰をすゑて研究出来る資金と設備が欠けて居るのみである！又、現在医術が伝染の防止に何程の信頼を持つて宜きか？或は初期は全治なし得るとか、或は何程のものは喰止め得るとか、或は未感染血族の保菌を絶滅なし得るとか、必ず斯くした権威ある発表と是に於ての施設とが現はれて愜しいと思ふ。何とか考へても癩に止めをさすのは医学なりと信ずる。隔離根絶法は「余儀なき方策」であり、西洋見習ひより一步も前進して居ないのであると云へると思ふのである。

又、薬学方面より考ふるに、東洋には古来より治療薬と云ふ物が少くない。元より怪物的な売薬も可成りあつた。然し問題はそれらの時代薬と現在使用薬と比較進歩の程度と言ふ事である。よしそれが特別効能薬の発見はなくとも何と何とは駄目にして、何と何とは斯くした効力ありと、ハツキリ認識せしめる事のみにて、決して無益とは思はれないと考へるものである。

癩医学は事、専門技術に属して我ら門外人の突込んで言へることに非ず、よし幾分の智識ありとも生半可に論ずべきでないと思ふ。

思ふに社会に対しても癩者に対しても、皆遠慮してか？思ひ切つて言ふ人の少いやうである、真剣に思ふ人の口より出る叱責は尊して益がある。よし、聞く耳は痛くとも必ず進歩へ足を向けるものである。特に一大飛躍のため、各方面よりの真剣の声が聞きたきものである。然して善きものを確く抱いて、百万の癩者へ温き手を差伸べて欲しいものと思ふ、

更に各方面の真剣の声は、癩事業及其の共鳴者に対して好参考となり、「美しき志」を寄せらるゝ路も発見さるゝのでないかと思ふのである。自分は時々かゝる有志者より「我等救癩の為に何を

為すべきか！」との声を聞くのである、漠然とした事に助力するよりは具体的な事に助力するは一層に力の入れ甲斐のあるものであらふと思ふ。同情を求めんがために言ふのではないのである。(遺稿)

### 癩者としての哲学 / 長田穂波遺稿

「癩者としての人生哲学」こうしたことが云ひ得らるゝや否は別として、事実の上より論じて見たいと思ふ。〔この1文は活字の級数が小さい〕

幾千年か以前、或は癩の創生まもなくよりかも知れないが、否、「癩菌創生」の内容に『癩者は生ける屍なり』との性質を含むであらふと言へるのである。この一句は実によく癩者に対する「社会観念」を表現し尽してゐると思ふ。これこそ癩者の全生活によりて証明し、又その血族の社会的境遇によりて刻印して来た処でもある。

より以上に愛情を深め看護の手を加ふべき『病氣』の時に、反つて血肉の者より嫌悪され、恨まれ、遠去けらるゝし、又発病者も自ら社会を呪ひつゝ孤独に座するのである。然も身心共に全く希望を失ひ、たゞ崩れゆく我をのみ荷つて行くのみの人間である。

療養所に対しても「善き死に場所ぞ」と諦める者もあり、「生きむが為めに」諦め得ざる者もある。諦めし者も悩む者も同じく存在である。この「存在」と云ふ自他共に全く葬り得ざる一大事業こそ、生ける屍と云ふ個人及社会の重荷にして問題は此点に残るのである。

いま癩者の姿を注視すれば、彼の天路歷程にある罪を背負へる人間の如く『葬り尽せざる重荷』に追い立てられ、嘯ぎ悶へつゝ果しなき暗黒の路をたどりつゝあるに気付であらう。泣くも嘲るも血族及社会としては癩者は「いとわしい重荷」である。

斯て各地霊場に或は河原部落に漂泊する醜き姿の行者は「遠ざけられし者」であり、療養所又その一場所の如く見る事も出来得るのである。

「療養所は癩者の捨処では御座なく、養生の為め預り居る処に候らへば、家族としての愛情に変わりなきやう御達し願ひ度候」、これは余りにも無慈悲な血族に対して注意をうながすため、或る療養所職員より某県の警察署へ届けられし手紙の一節である。又「癩者の如きものは廢船に積みて大海に沈めるべし」と叫びし議員もありしとか、斯る实例は何を語るか、療養所は社会のウルサキ重荷



を遠ざけ、或る程度の処理法と見るべきである。

よし、社会及血族は果してそれによろしきや、先づそれは止めて、さて処理されし者の背負る重荷は何となれるか、昔ながらに其儘である。否、呪ひつゝも呪ふ社会へ、恨みつゝも恨む血族への愛着は断ち切れないのが癩養所生活の実際心理である。即ち否定しきれない自己が他へ希望を残してゐるのである。社会及血族が癩者を全く葬れない如くに、癩者も又否定した社会人生を全く葬り得ないであるのである。

我等は社会に剰余価値がある故に、癩者なりし後は扶養さるゝ権利があると、かつて健康で働きし時の剰余価値を論ずる者も起るし、元より人道論や道德説もある、ここに於いては既に癩者としての人生哲学は、立派に成立して居るのであると思ふ……。

要するに癩者も、血族も社会もが余りにも自己的であつた、自己に捕はれ過ぎて居たのである。故に、解決せむとして反つて一層にコンガラかして来たのであつたと云える。されば自己解脱した者は、呪は消えて祝福と化し、恨みは去りて感謝となるのである。斯る新生に入るには何と云つても「宗教の力」によりて見る処であつたのである。されば是を一種特別の人に於てのみ認め得ると考えられたものである。

愛とは美しき奉仕である、即ち凡てのありようを知る事である。知るとは実行である。即ち上よりも下よりも、健康よりも病者よりも、自他の美しき立場を知りて、その間に定められたる生命に生きる事、これこそ神の道であり宗教的實際の世界である。されば自己解脱とは更に大にして、新らしき自己へと止揚する段階であると云ひ得る……。

療養所の存在の意味が個人救済より止揚して祖国浄化と高まつた。癩者のためでなく国家の政策である。こゝに於いて我ら国民の義務として、正しく立てる自己を認める者である。いまや社会と癩者とが各自持場に尽しつゝあるのでであると云ふことは、「国民としての自己肯定である」、さらば個人として死に來た者も、最早個人として死ぬ事はゆるされなくなつた。この自覚は全く新らしき生命と云ふべきものである。故に社会も血族も、癩者も共に各自が「何を為すべきか」と云ふ事がハッキリすると思ふのである。

## 松籟海鼓（新日本建設と青松園の巻）／穂波生〔『青松』第15号、1945年〕

序文 ＝ 現在われらの直面してゐる最大関心事は『新日本建設』と言ふことである。是の有つ内容の認識如何によりて各々思想も動行も異なるであらふ……。

しかし如何なる努力も正しく真相に添はざれば無効に終る。のみならず意外な犯罪と見らるゝ破滅になる場合なきにしもあらず。故に凡て事物に対処するには、先ず ＝ 正しく認識してかゝると言ふことが大切な用意である ＝ 元より順応するにも排斥するにも斯の用意なくしては自己の確信が得られないと思ふ者である。決して危機は去つてゐない！！

そして新日本建設とは何ぞや？、先ず斯の問題に当面するのである……この国家及社会の向へる真相によりて、自ら青松園内の今後の方針も決定するであらふし、我らの意向も定まり更にヨリ善き工夫も加え得るであらふ。こゝに新日本建設と青松園と題して断片的ながら記して見るものである……。

再建 ＝ 新時代の発生とか時代の推移とか言ふことには、必ず動機と言ふべきものがある。しかし我らが現在直面してゐるのは ＝ 単なる時代の転換ではない ＝ 従来 of 日本国と言ふものが敗戦と同時に消滅し尽して、現は戦勝国の所有に歸して終つてゐるのである、『日本政府とは利用価値に於てのみ認める』とは彼の明かな宣言ではないか、この宣言は権力がともなひ……国祭日さえ遠慮申附ケられた……この消滅国家の民であると言ふことを正しく認識せねばならぬ、さもなければ、新しく再建精神は沸かず……古きに未練を残して何もかも日和見主義に流れ、反つて悪結果を招きつゝあると言ひ得る……

中には『現に日本は存在するにあらざや』と言はんも、こは誠に認識不足にして、視よ現下の実情を！、精神的にも形式的にも米国に同化されつゝある ＝ 同化に於てのみ日本の現存が認められ、再建日本が約束されてゐるのであるまいか！！

垂範 ＝ この意味に於て、今上陛下がマツカーサー御訪問の如き、又は首相の宮殿下の御態度など、誠に尊き我らへの卒先御垂範であり給ふ……真に敗戦日本の姿である……元より米国より見て不徹底と思ふやも知れない、それは我国従来 of 慣習に対する認識不足である、若し彼らにして日本歴史に通暁して居らば ＝ 斯る御態度がいかに破格の事かを理解なし得るで ＝ あらふ！！

されば御垂範に照合しても再建とは ＝ 同化の途に忠実に直進して日本国の復活の新姿が何か

を示されてみると知る = この中心点を正しく認識して立たねばならぬ.....。

然るに新らしき朝に呼び醒されながら未だ昨夜の夢に捕れて、ぼんやりし、或はうはごとを言ひ、正氣づいてゐない輩が多い！！

何となれば悪血が眼をふさぎし官僚病者が余りにも多過ぎて自己地位に恋々とし特権護持を慾するからである.....。

破碎 = 又一般大衆にしても軍国主義、国粹主義、官僚万能などの井底に叩き込まれ、永き井蛙生活に慣されし故に広き世界を見る目がなく、この点に於て無智なる故に.....俄かの変化にうろたえてゐるのである.....其処に終戦の折の不始末があり、そこに公然の闇があるでないか！！

さればこそマックアーサーは『日本再建』の第一準備として.....大衆解放.....につとめてゐる。然し彼の民衆解放の主旨は軍国主義と国家至上即ち極端な国粹主義並に現官僚振り打破にある事は明かである。しかして極端な無自覚な井蛙が一躍自由の下に解放されし故に = 又もやうろたへて我儘放縦な勝手な振舞が多く現れるであらふ = 此処にも大衆解放の正しき認識と言ふ事が必要であり、自由の持つ道徳性即ち自由の真相を知つて人権化す用意が大切である、『真の自由は真理に即した道徳によりてのみ保証され存在する』ものである。故に自由とは破碎とは全く別個の真理の有する輝きそのものである.....。

指標 = さて我らの存在と日本再建とが戦勝国の指標によりて決定される運命にあり。その指標が同化にある以上は自由ではなく制限が自らある訳である！！

しかも = 同化の内容をデモクラシー = と言ふスローガンで叫ばれてゐる。故に我らの国家及生活は、その叫声よりも内容に添ひてのみ展開して行かねばならぬ.....これが現実の日本であらふ.....注意すべきはデモクラシーの解釈が如何にあらふとも、これを唱ふる目的は決定してゐると言ふ事実問題を忘れて理論にのみ走つても無駄で.....うつかりすると疲労と損失に終るであらふ.....重大なることはマツカーサーの指の動き、即ち指標であると思ふ。米国人は単純性である故にスローガンの内容も目的のみ指してゐるのであるまいか！、そこへゆくと日本人は議論が多く余り複雑に考へ過ぎる。何事もスローモーションだと齒搔がらるゝ、この現実よりして考へ合すべきではあるまいか.....。

既証 = 彼の明治維新の際に.....文明開化.....と言ふスローガンに浮かれて各方面に西洋文明を

とり用ひたやうである、軍隊はフランス式、政治は英国風、国民教育にも、何にもかにもである。

しかし、それは単なる外衣のみ、丁度野猿に麻上下を着せたやうに = 真精神を忘れてみた = 何と怪々たる半可通のみか！！

元より過渡期ゆえに……と言訳した向もあるが、視よ、魂のない文明開化はついに今日の結果を招来したのである。噫、世界の一等国民と自唱した我らは = ソ聯を知らず米国を知らず支那も知らず = 盲目の甚しさよ……。そしてデモクラシーに面喰つて方角が立たぬと言ふ。片面には半可通の猿奴がデモクラシーの外衣を着けて狂ひ廻らんの浮腰である。

先ずマツカーサーの指標に添ひ再建に尽すと共に、夜の床の一時を過去の証跡につきて静思黙想し二度び形式的屍と結婚する事なく正しく生命と同化すべきである……。

明治大帝 = 今日我らの頭に憲法発布前の五箇条の御誓文がうかびくる、同日（明治元年三月十四日）賜りし御宸翰は余り知られてゐない。誰が雲に包みしか？、国民教育の二大支柱の一つは欠くるに至つたと信じてゐる……。（上略）

竊に考ふるに中葉、朝政衰へてより、武家権を専にし、表には朝廷を推尊し、実は敬して之を遠く、億兆の父母として絶へて赤子の情を知ること能はず、遂に億兆の君たるも唯名のみになり果て、其れが為に今日朝廷の尊重は、古に倍せしが如くにて朝威は倍々衰へ、上下相離るゝこと霄壤の如し（中略）朝廷の政総て簡易にして、斯の如く尊重ならざるが故に、君臣相親み上下相愛し（下略）

五箇条の御誓文と合せ頂くべき御心である、然るに又々君臣親和の実を拒み、垣となりしは何者か……何者でありしか！！

先ず生命 = 斯く調べて知る処は、明治維新の文明開化は = 先ず父子の情誼の確結にあられた = この根本に立ちて万機公論によりて決す。何方の点より観るも道德的民本自由主義であると思ふ！！

此处で一言ひたし度きは、天皇制と言ふ事である。外国の皇室の如く成上りや他より迎戴したのとは……我が皇室は全く異なる……政治機関の一部などでなく、氏の上であり民族の総本家である。この歴史上の事実こそ万邦無比である = 故に政治機構が如何に変化しても氏の上としての尊敬と親みとは変りなくはらふべきである。

斯る事実を無視して或は時代、或は政変と言ふ如き感情に走りて外国の皇室と混同視するは＝  
自らの生命の源を排するにひとしき者である＝斯る徒輩はデモクラシーとは親を否定するもの  
と思ふ愚者に過ぎぬ。米国の個人主義者でも、矢張り家庭の親しみ愛情は忘れてゐないであらふ...  
....

デモクラシー＝我らは外へも内へも目を掩はれてみたと思ふ.....。

さて、デモクラシーと言ふ意味が自由平等主義として純理論的に観るならば.....これも机上の空  
論に過ぎない.....視よ世界の何処にその如き国があるか？

或は米国にと言ふ人あらむ。しからば彼国のニグロに対する態度は如何。智脳は軍人に集まれる  
に非ずや。更に言へば＝現在の米国にワシントン及リンコルンの魂気、果して健在なりや＝と  
敢て問ふものである！！

然らば米国はデモクラシーでなしか、否、世界一民主国である。故にデモクラシーにも限界があ  
る、一定の法式と生命がある、これありて健全であると言はねばならぬ！！

斯く観じて来るならば日本には日本としてのデモクラシーが実質的に花を咲かせ得る筈で、そこ  
に政治形体の如何は問はぬ、たゞ軍国主義と国家至上主義とを内容外形共に払拭すべしと要求され  
てゐるのである.....。

人権と共産＝デモクラシーが人権尊重である以上、自分の如く他人の権利をも認め且つ尊重せね  
ばならぬ。他に義務を要求すれば自分も義務に服さねばならぬ。他人の責任を問ふならば自分も進  
みて責任をとらねばならぬ＝デモクラシーは人権中心によりて法的社会が構成されるのである  
＝そこに政治組織あり経済機構もある！！

然るに共産主義は＝社会は活ける存在にして凡て社会精神に吸収される＝社会は絶対的で  
あるとなるやうに思ふ。

前者は個人主義であり人格主義である！！

後者は社会主義であり物質主義である！！

並べて見ると一方は人間が濃厚に浮び上るのに引換て、一方は人間が裏にかくれて終ふのである。  
何れが善きかは此処に論じないが、米国が共産主義を好まぬ事は確實であり＝健全なデモクラシ  
ーは共産に勝る＝との自信たつぷりが匂つて居るので其処に『思想は思想を以て』と高くとまつ

てあるらしい.....。

転向 = 共産主義の社会観が人権主義に反対であるが又一面に於ては確かに有益な点も尠くない。然しそれは根本精神にあるのでなく機械的形式に於てのみである.....この点にソ聯も宗教及待遇に於て精神的に個人権利が認められてゐる.....やうである事は我らの注意をひくのである。

ナチス及ファッショの如き、或る国家権力の下に個性存在を認めざるは = 奴隷制度に過ぎぬ = 大いに異なる如くにして実質は共産主義の民政と同じである。即ち一権力の奴隷と社会精神の奴隷との相違に過ぎぬ！！

『よらしむべし知らしむべからず』の軍国主義、官僚主義、も又民衆奴隷主義である、故に従来の我国は.....皇室の御精神に反し奴隷制度に化してゐた.....故に政治も教育も凡てが = 人権主義に転向すべきである = 即ち奴隷根性を清算して『自主』的に発足すべきである。此処に道徳が自立するのである。即ちデモクラシーはこゝより初るのである！！

独立 = 理解なき権力の下に無理矢理に強制され圧迫されし国民は凡てが他動的になり依存的になり = 指示命令なくては何事にも動けなくならされて終ふ = 個人としては主人の顔色のみを見、国民としては政府の意向におもねり、そこに立身出世を計らむとする、故に主人が油断し政府が命ぜされば.....ヨシわかりきつた為すべき事も怠りて為さぬ.....こゝに於て悪と知りつゝ従ひ善と知りつゝも反むくに至るのである！！

遂に善悪の正しき判断力を失ひ、卑屈な愚痴な狭慮な横着者が出来上るのである！！

噫.....人格の明朗性いづくにありや？

噫.....道徳的権威いづくに輝くや？

斯る国民には独立の覇気なく = 自発的の善行もなし = 故に社会道徳即ち公衆道徳に於ては無価値である.....。

若しこれ我らの日常と為さばデモクラシーに遠く、且つ幸福、自由、平等など望むべくもなく国家の独立も危き哉である.....。

青松園 = 以上によりて先ずデモクラシイ的再建日本の根本生命を考診したのであるが、若し外形と理論に終らば妙な『ぬるめた国家』が現れやう危機はある。

さて青松園は国家の一細胞として寄生する故に切り離れて考へ得られないのである.....、然し園

が人格的に確立すれば独的に自発なし向上の余地が十分にある……ゆるされし範囲に於て『我らの社会』を理想化し得るのである。新日本の真生命に住し得て更に国家に報ひ得ると同時に＝広く社会に伸び得るのである＝然し、それにはそれだけの人格を養生せねばならぬ。これは要易な業に非ざらむも必ず出来得る……上下一心デモクラシーを実現に協力前進すべきである……狭き島を広く住み、みぢめな運命を明朗に、無益な生存を有益に更生すべきである。

これなくして青松園の義務と責任とは尽し得たとは言はれない。当局も病友も国家と共に『人格的再建』を提唱する者である。

性質＝日本従来の社会事業が性質より組織に片重してある（官営のこと）この組織に捕はれ性質を軽扱してある点は官営の凡である。こゝにむつかしき規定と複雑な手続とに禍されてある……主管といえども制限を受けて営業の自由がゆるされてみないのである……斯る正体を知つてみないと当局は板挟みになるのみである。

青松園のみでなく大学校さへ＝役所か病院か。学校か役所か＝解し難いのである。そして実際は役所七分である、即ち当局者が皆官吏である故に『役所気分』が甚だ濃厚で、凡てが官僚的である……特に警察等にて定形につくり上げられし人の転職して来た場合は官僚臭が格別に激しいであらふ。

実の処、癩療養所は＝役所か病院か？＝判断に苦しむ場合が多いのである。これは当然の事で寧ろ『組織の性質』の実相である。高等官を知らぬかッと叱られた例もあるが、病者と院長でなく官吏と病人である＝官吏と病人では親和の情は結び難い＝と思ふ！！

下克上＝役人は威張り散らすものとの観念が決して正しくない事は青松園では証明されてある……。

然し『役人は威張』ものとの観念は武家時代より身心に叩き込まれし深刻なものである、『俺は役人になつて威張れる者になる』とて警察官となつた人がある……出世とは威張る者となる事なりとは自他共に思つてゐる！！

こゝに於て反動精神として民衆の底には『下克上』の色彩があつて。役人に勝つを快感となし英勇となすのである＝無自覚の内にも反感を持つてゐる＝民衆の遺伝性的思想である。青松園患者に果して斯る思想はなきや否や、敢て問ふ！！

この心は.....ことごとに当局を疑ひ、その方針に不服を唱ふる.....斯の下克上の患者では当局と親和は結び難い.....と思ふ！！

我らは先ず斯く深く反省して頭のきりかえをしてかゝらねば = 闘争は来ても真のデモクラシーは青松園には来らないと思ふ.....。

協和会 = 協和会も多分に官僚臭が染みついて居る。『何々をやる』と言ふ場合に何かおどし文句が附いてゐる。最近の例は = 配給品なさず = の如きである、

これは会員全体の恥ぢである。悪く言へば個人々格のはづかしめである！！

しかし若し自分が詰所に立てやると為ればどうか！矢張り言はねはならぬ、『何々を守らぬ者には配給なさず』と.....無理もない斯る悲しい恥かしい宣言を当然とせねばならぬ我らの様態でないか.....協和会の実相でないか。そこに自づと詰所は官僚臭をおびて来る！！

つまり代行でなく役所であるとの気分！！

實際上総代等は敬遠的で、親しみは失せられる.....選出した代表を『煙たがる』でないか？、真に律法的でなく信親的ならばヨリ以上に近寄り、ヨリ以上に親しく成る筈である、

そこには会員各自の公衆道徳の軽重が問はれてゐるのであるまいか.....確に生命線に於て協和会に欠点があると思ふ！！

欠点 = 詰所は協和会の代行機関である故にこそ選挙制である = 決して天下り式ではない。一般の欲する処を行ふべきである。その代行者に反抗しないでも、その目をぬすみで悪行爲をやり、種々とひなを為すのである。

八釜敷く言はぬからとて.....常識にてわかり切つた悪い事をする.....これ公衆道徳の欠けてゐる実証である。

斯る故に詰所より天下り式に或命令の如く出なゝらなくなる.....それは詰所としては全般の幸福を計る故にである.....この道徳的人格に欠け、個人即ち利己のみに走る故である。それでも更に我儘者がある故に『配給せぬぞ』と鞭を振り上げてかゝらねばならぬのである。これを要するに会員道徳の欠点である！！

会員資格とは会員道徳であり。会員道徳は青松園をデモクラ化する基本生命である。若の自覚と認識が欠けるならば、何時迄たつてもデモクラシーは来ないであらふ.....。



衣と体 = 選挙の度に『あひるのたまごだ』との声を耳にする。即ち = 選びし責任 = を忘れる事である。自分が信頼して依頼した人に対しては協力と親和と完成との責任感がなければならぬ、是れを会員道徳心と言ふ.....故に一方詰所に依頼すると共に一方自ら自発的に凡てについて協力的でなければならぬ.....。

特に誰でも『為たり言たり』に善悪の判断はつく筈である。これは人間としての常識で普通の事である。これを守る処に人格があり人権は生じる。これなくて何の権利ぞ！！

いたづらに要求のみ高くして自分は非人格的言行を為しつゝありはせぬか.....。

= それ規約とか組織とかは衣である = 何程とゝのへ飾るとも、体の腐つたものは悲哀の極みだ.....。

規約及慣例等衣粧は立派でも中身がなつてゐないとすれば猿芝居的に過ぎない。希くバ会員としての道徳的に生きむことを！！

面目 = 更に進みて我らは『会の面目』と保つべしとの自覚を盛にすべきであると思ふのである...  
....

この点については畑作荒し、大島神社や仏前の供物荒し、等々の噂.....勤労者への配給に対する  
眩き、役員待遇に不平、等々の風説などは会員自ら傷付ける事である.....。

別して国禁に触れる言行、園職員に対する態度、治療場で材料無断持出し、慰問者に対する礼儀、  
種々の流言等がもしあらば = これこそは協和会の面目丸つぶしである.....。

公衆道徳の欠乏は其の社会の健全性が弱く = 正しき『社会制裁』的傾向を欠く = 寧ろ我儘放  
縦を助長する如き結果に随すものにて、決してデモクラシーの善果は結ばなくして、外部より見下  
げられるのみである！！

不健全な社会は常に解体の危機をはらむ、若し協和会解散の声の起る如きことあらば其処には会  
員各自の公衆道徳性の不健全を恥ぢねばならぬのであるまいか.....。

会徳 = 協和会の益徳は決して僅少にあらざるを思ふ！！

故池田補導部主任の曰ク『協和会がなく諸氏の協力なくては会館程の大監禁室ありとも今日の如  
き和平は望み難いでせう』この言は永年の御苦労と経験との上より語られし故に権威がある.....こ  
れらは補導部と言ふ接触面に立てる人の認識にし、或は園長殿も御存じなき程のものであらふ.....

斯くて会徳は園当局は元よりの事。過日も総代の放送した如くに我ら相互間の日常生活の幸福は千万無量であることは言語に尽し得ぬものがある。

若しそれ = 協和会を否定なす者ありとすれば、それは極端なエゴイストか、然らざれば反逆乱闘を欲む悪魔の同類である = 健全な常識家は我らの如き雑多な寄合社会に取りて協和会の公德は、何方より見ても高く評価せずにはゐないであらふ.....。

或人が大島の病者は紳士的でシッカリおちついてゐると言はれたが誠に面目である。

奉仕 = 人間の生存価は『人格的働き』に有りとは真理である！！

働きは苦しいと言ふ。然りされど死人は働き無し = 故に多く強く働き得る者はヨリ善き生存者である = 特に生ける屍とさへ言はるゝ癩者として他に勝りて働き得ることは幸福なる事である。特定室に臥す身となりて作業を為し時の幸福を痛感するものである。有閑階級などは人生の下なる事である.....。

然し働きの最高最善なる価値は人格的働き即ち奉仕である。たゞ自己的慾にのみ働くは『利迷』と言つて慾のまよいに過ぎない故に共産主義に於てもナチス及ファツシヨにしても何主義より言つても『利迷』は排斥されてゐる位い卑しい動物でしかない = 特にデモクラシーには奉仕は大切である。この精神なくては新日本は前途が栄光の約束されない！！

されば会員は作業方面なり特に役員として奉仕に立たれむ精神こそ生き甲斐であり。又室内相互間にも斯くあり度いと思ふ.....。

助弱 = 特定室を善くせよ、日頃斯く主張なして一部より嘲笑を受けてゐる。然しこの主張は決して自己の為め又は弱者の見方をのみ唱ふる者ではない。軽症にて働く人も、必ず弱くなる = その前途を善くして置く事は憂ひなく現在に十分働き得る為めである = 故に今の奉仕者の前途の備への為めに主張する所以である.....。

弱者が働かずして過大な要求するものは権利の悪用である。然し且て働きし人への待遇も必然の問題である。こゝに弱者の要求でなく過去の奉仕に対する待遇である！！

されば働力ある内になまけたる者は待遇をひとしく受けて内心恥ぢ且つ感謝深く覚ゆべきこそ誠であらねはならぬ.....。

デモクラシーとは言ふのみで理解なし難い者にも、斯くて大島青松園は具体的にデモクラ化する

と信ずるものである。

今号は大塚一氏の記念誌となす由、こゝに心一杯の一文を草して追善の意をいさゝか表す次第である……。

盲言多謝 = わが愛国心は赤裸である。上に向つても病友に向つても真情を吐露せざるを得ない。

或は盲言を責むる向もあらん……ヨシ責めらるゝも新日本の青松園の前途の名誉と幸福とを希ふ老婆心は燃えて止み難い！！

故に一片の美文麗句を並べて止み得ざるもの。諸兄弟、各位の御寛読を伏て乞ふものである……。

((おはり))

颱風に未枯れし樹の秋若芽

黙つては通れぬ秋の荒田畑

#### 新日本建設と青松園 / 長田穂波〔『青松』第17号、1946年〕<sup>14)</sup>

昭和二十年十二月十八日長田氏急逝セラル。本論文八園内回覧誌青松最近号ニ執筆セラレタル論文ノ抜粋ニシテ十九日ノ葬儀ニ旧詩篇「ラザロ死ネリ」ト共ニ朗読サレシモノ。ノ一読遺書トシテ胸ヲ打ツモノアリ

新日本建設と青松園 / 長田穂波

##### (一) 新日本建設

現在我等の直面してゐる最大関心事は「新日本建設」と言ふことである。

新日本建設とは何ぞや?、その問題の解答内容によつて我々の動向は決定せられる(中略)

マツカーサー司令部は「日本再建」の第一準備として大衆解放に努めてゐる。彼の民衆解放の主旨は軍国主義、国家至上主義即ち極端な国粹主義並に官僚主義の打破にある、

然るに今日迄かゝる強権の下に圧迫され来つた無自覚なる国民は一躍自由の下に解放せられ我儘放縦な生活に流れんとしてゐる。

我々は眞の自由の意義を認識しその道德性に盲目であつてはならぬ。「眞の自由は真理に即した道

<sup>14)</sup> この史料の収載にあたって文字入力には滋賀大学経済経営研究所の研究サポートを得た。

徳によつてのみ保証され存在する」ものである。真理の輝のない所に自由はない。

明治維新には文明開化のスローガンの下に凡ゆる方面に欧米の文化を取入れた。これは全く模倣であつて外面のみである。真の精神は無視され外衣のみの移入である。我々はデモクラシーに於て、自由に於てこの先轡を踏んではならぬ。我等は夜の床の一時、過去の証跡につき静思黙想し再びかゝる形式的屍と相結ぶことなく正しく真生命と同化すべきである。

明治新政の根本は実に民主主義であつたことは五箇条の御誓文に明らかである。万機公論に決すべきが明治大帝の御聖慮である。同日、即ち明治元年三月十四日賜つた御宸翰には次の如く拝承する。

竊に考ふるに中葉朝政衰へてより、武家家権を専にし、表には朝廷を推尊し、実は敬して之を遠け、億兆の父母として絶へて赤子の情を知る事能はず、遂に億兆の君たるも唯名のみになり果て其れが為に今日朝廷の尊重は、古に倍せしか如くにて朝威は倍々衰へ、上下相離るゝこと霄壤の如し、云々

明治大帝は君臣親和の実をかくまで御宸念遊ばされたのである。

銘記せよ。デモクラシーも各国に於て一様でない。米国のデモクラシーと新日本のそれとは同一でない。日本には日本独特の自由主義が建設せらるべきである。日本には天皇制がある。これは外国の皇帝の如く成上りものや他から迎へ入れたものではない。勿論政治の一機関ではない。これは実に民族の総本家である。日本の親の親である。この歴史上の事実こそ万邦無比である。故に政治機構が如何に変更しても氏の長として尊敬と親和にvarietyない。斯る事実を無視し事局の变革に際し感情に走り外国の皇室と混同視するのは自らの生命の源を絶つ愚者である。

一方自由主義の発する所、独立の精神の確立するのは米国建国史にも明らかである。理解なき権力の下に圧迫されて国民は凡てが他動的になり依存的になる。指示命令がなくては何事にも動けなくなる。個人としては主人の顔色のみを見、国民としては政治の意向におもねり、そこに立身出世を計る。故し主人が油断し政府が命ぜざればヨシ解り切つた仕事も怠る。終には悪と知りつゝ従ひ、善と知りつゝも為すなきに至るのである。善悪の正しき判断力は失はれ、卑屈、狭量な横着者となるのである。噫かくていつこに人格の明朗性があらう。道徳的權威の輝を尋ねても空しい。

斯る国民に自発的善行はない。独立の覇気は皆無である。社界道徳、公衆道徳に何の実行力もな

い。かくてはデモクラシーの美しき果たる、自由、平等、幸福などは望むべくもなく、果は国家の独立さへも危き哉と云ふべきである。

## (二) 青松園の場合

抑青松園と雖、国家の一細胞として真の自由主義に徹し人格的に確立する時、自発的に向上の道に進み得るのである。許されし範囲に於て、「我らの社会」を理想化し得るのである。かくて新日本建設に寄与する為に人格を養成し上下一心真の自由主義理想境建設に協力邁進すべきである。狭き島を広く住み、惨な運命を明朗に、無益な生存を有益に更正するのである。道は近し。当局も病友も「人格的再建」の一途のみである。

日本従来官立社会事業はその性質よりも組織を偏重してゐる。官立の弊は難しき規定と複雑な手続である。青松園のみでなく大学さへ同様であつてそこに病院も大学もなくたゞ役所があるのである。「役所気分」が濃厚で凡てが官僚的である。療園であつて病院か役所か解らない。看とるものと病者でなく官吏と患者では親和の情は結び難いのである。

武家時代から叩き込まれた「役人は威張るもの」との観念に対し民衆には反動精神として「下克上」の色彩があり反抗するのを快とし英雄的であると思つてゐる。青松園患者に果して斯る思想はなきや否や、敢て問ふ？

この心はことごとくに当局を疑ひその方針に不服を唱へる。かゝる下克上の精神では当局と手を採つて進み得ない。

我々はこの新発足に当つて深く反省し頭を切り代へて進まねば鬭争は来ても真のデモクラシーは青松園の前途に期し難いと信ずるのである。

協和会も多分に官僚臭が染みついてゐる。「何々をやる」と言ふ場合に何かおどし文句が附いてゐる。最近の例は「背く者には配給品を分へず」と言ふが如きである。これは全員全体の恥である。個人の人格が恥かしめられるのである。併し若し自分が詰所に立つてやるとすればどうか？、矢張り言はねばならぬ。「守らぬ者には配給をなさず」と無理もない。斯る悲しい恥かしい宣言をどうしもしなければならぬ我等の状態でないか。協和会の実相でないか。その結果自づと詰所は官僚的になる。

実際総代は敬遠せられる。親しまれぬ。選び出した代表を煙たがるではないか。この隔りとなる

のは会員公衆道德の欠陥ではないか。

詰所は協和会の代行機関である。故に選挙制であつて決して天降り式ではない。この代行者に反抗しないまでもその目を盗んで悪行為をなし又種々詰所を批難するのである。八釜敷言はぬからとて常識でも解り切つた悪い事をする。これ公衆道德の欠陥である。かくて詰所は全般の幸福の為、心ならずも命令し又我儘者に配給せずと鞭を振り上げてかゝらねばならなくなる。協和会員の資格は何ぞや?、会員道德である。この会員道德こそ青松園に眞の自由主義を来らしめる基本生命である。この自覚と認識なしに青松園の新発足は覚束ないのである。

選挙の度に「あひるの卵だ」との声を耳にする。即ち選びし責任を忘れる事である。自分が信頼して依頼した人に対しては協力と親和をもち、事業の完成に責任感を領たねばならぬ。これが実に会員道德である。徒に要求の声のみ高く自らは非人格的言行を平気で為しつゝありはせぬか。

思へ、規約とか組織とかは衣である。これを何程整へ飾るとも、若し内容たる肉体が腐つたものは悲哀の極みである。中身が立派でなければ猿芝居に過ぎない。希くば会員として会員道德に活きんことを!

更に進んで我らは「会の面目」を保つべしとの自覚を盛んにすべきである。畑作荒し、大島神社や仏前の供物荒し、等々の噂.....勤労者配給に対する眩き、役員待遇への不平、等々の風説は会員自ら傷つける事である。別して国禁に触れる言行、園職員に対する非礼、治療材料の無断持出し、慰問者に対する無作法　かゝる非難があればそれこそ協和会の面目丸つぶれである。道德的欠乏によつてその社会の健全性は失はれ社会制裁は力を失ひ我儘放縦が助長され外部から見下げられる。道德的不健全な社会は常に解体の危機を妊む。

若し協和会解散の如き声が起らばそこに会員各自の道德的欠陥を注視しなければならぬ。

協和会の功績は決して僅少でない。嘗て今は亡き池田補導部主任が云はれた「協和会なくば会館程の大監禁室ありとも今日の和平を望み難し。」と、この言は長年の御苦労と経験から語られたから権威がある。協和会が園の平和を保ち会員生活の幸福を増進する事は言語に尽し得ぬ程である。

若しそれ協和会を否定するものありとすれば、それは極端なエゴイストか、然らざれば反逆乱闘を好む悪魔の同類である。健全な会員は一人として協和会の重要性を否まぬであらう。人格的完成は人格的働きとなつて現れる。特に生ける屍たる癩病にとり他の病者に勝つて働き得る事は幸福な

事である。一度特定室に臥す身となつてみて、作業を為し得た時代の幸福を痛感するのである。この人格的働きの最高最善なるは奉仕である。自己の慾のみのために働くのは卑しい。デモクラシーの真髓は奉仕である。これなしに新日本の前途に光榮は約束されない。会員は作業に於て、又特に役員はこの奉仕の精神に立たれんことを！、こゝにこそ又各自の生き甲斐を見出すのである。一方我々は特定室を善くせよの声に耳を傾くべきである。一部のものはこれを嘲笑するがこの主張は決して今在る弱者のみの為ではない。今輕症で働く人も必ず弱くなる。

その前途を善くしておくことは、憂なく現在に充分働き得る道である。今の奉仕者の前途の備である。弱者が働かずして過大な要求をするのは権利の悪用であるが且て働き奉仕した人への待遇は必然の問題である。事に心を致さねばならぬ。

わが愛園の至情は赤裸々である。上に向つても病友に向つても真情を吐露せざるを得ない。

或は盲言を責むる向もあらん……よし責めらるゝも新日本の青松園が前途の名誉と幸福とを希ふ火は燃えて止み難い。

敢て諸兄姉各位の熟読反省を伏して乞ふ次第である。(以上)